# カゲロウ目

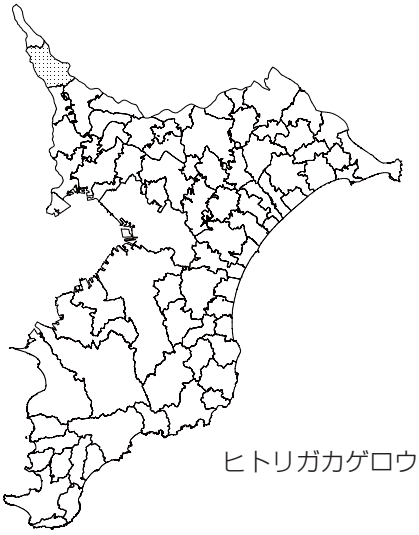
## A　ヒトリガカゲロウ　ヒトリガカゲロウ科

*Oligoneuriella rhenana* Imhoff, 1852

国：準絶滅危惧（NT）
千：A－A－A

**【種の特性】**体長18-20mm、カゲロウ目では大型種に属する。成虫、亜成虫は全体に白色。幼虫は大河川の川底に生息する。6-7月に羽化する。
**【分布】**本州。ヨーロッパ。
**【県内の状況】**野田市（利根川）で生息が確認されて以来（石綿，2001）、国内では採集された記録がない（石綿・竹門，2005）。農業用水路や大河川の下流域に認められていた種と思われるが農薬や家庭排水のような水質汚染によって激減した種と思われる。既知の日本産カゲロウのうち、人為的環境改変によって最も影響を受けた種の一つと思われる。
**【保護対策】**圃場整備等、水田環境の改変の際にはそこに生息する動植物に配慮することが望ましい。
**【引用文献】**石綿（2001）／石綿・竹門（2005）
**【写真】**P.166

（石綿進一）



ヒトリガカゲロウ

## A　サトキハダヒラタカゲロウ　ヒラタカゲロウ科

*Heptagenia flava* Rostock, 1878

国：掲載なし
千：A－A－A

**【種の特性】**体長10-14mm、比較的大型のカゲロウ。亜成虫は全体に黄色。幼虫は清澄な小川の緩やかな流れに生息し、川底の倒木などの表面にしばしば認められる。生活史はよく分かっていないが、県内では3-4月頃に羽化する。
**【分布】**北海道、本州。ロシア、ヨーロッパ。
**【県内の状況】**2000年のRDB報告書（石綿，2000）同様、幼虫は八街市内の水田用の水路で確認されている（八街市，17.III.2010，石綿進一採集）。北海道、東北を除く他府県では未だ確認されていない。過去の環境評影響価調査報告などでは、本種の県内における記録はあるが、標本の確認ができないので分布から除いた。幼虫は谷地などの清澄な小川に数多く生息していたものと推定されるが、開発に伴う環境改変や宅地から排出される有機汚染によって生息場所が狭められているものと思える。
**【保護対策】**谷地の環境を保全することが望ましい。
**【引用文献】**石綿（2000）／石綿（2005）
**【写真】**P.166

（石綿進一）

サトキハダヒラタカゲロウ

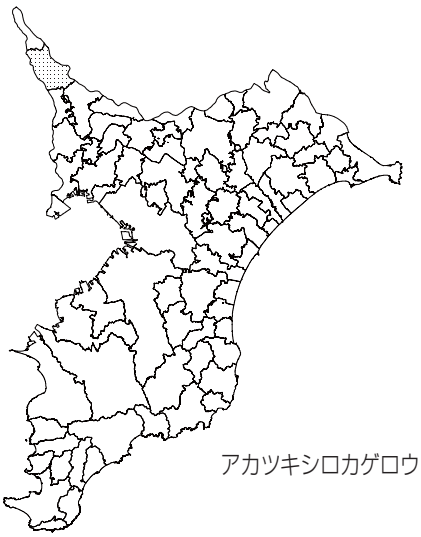
## D　アカツキシロカゲロウ　シロイロカゲロウ科

*Ephoron eophilum* Ishiwata, 1996

国：情報不足（DD）
千：D－D－D

**【種の特性】**体長18-25mm、カゲロウ目では大型種に属する。成虫、亜成虫は全体に白色。幼虫は大河川の川底にU字型の穴を掘って生息する。7-10月に羽化する。
**【分布】**本州（利根川、荒川）。
**【県内の状況】**利根川の下流域では普通に認められる種であるが、野田市がその最下流地点と思われる（石綿，2000）。
**【保護対策】**コンクリート護岸は幼虫の生息場所を奪うことになるため、自然性の高い河川環境を保全することが望ましい。
**【引用文献】**石綿（2000）
**【写真】**P.166

（石綿進一）



アカツキシロカゲロウ

## D　ミツトゲヒメシロカゲロウ　ヒメシロカゲロウ科

国：掲載なし
千：無－無－D

*Brachycercus japonicus* Gose, 1980

**【種の特性】**体長4-6mm、カゲロウ目では小型種に属する。翅は一対で後翅を欠く。幼虫は頭部前方３個の突起をもち、比較的大きな川のシルトの多いバックウォーターなどの川床に生息する（Tojo, 2001）。羽化は日の出前の早朝に行われる(Tojo, 2001)。
**【分布】**本州。
**【県内の状況】**利根川の下流域では普通種は、関宿町が分布の下流地点として確実な記録と思われる。成虫のみ採集されている（石綿, 2001）。
**【保護対策】**コンクリート護岸は幼虫の生息場所を奪うことになるため、自然性の高い河川環境を保全することが望ましい。
**【引用文献】**石綿 (2001) ／ Tojo (2001)
**【写真】**P.166

（石綿進一）

ミツトゲヒメシロカゲロウ

## D　イシワタマダラカゲロウ　マダラカゲロウ科

国：掲載なし
千：無－無－D

*Ephemerella ishiwatai* Gose, 1985

**【種の特性】**体長5-7mm、カゲロウ目では中型種に属する。幼虫は清澄な小川、平地流に多く、水中の植物の幹、葉上で確認されことが多い。羽化は5, 6月に行われる（石綿, 2005)。
**【分布】**本州、四国、九州。
**【県内の状況】**千葉県内では、新たに八街市で確認された（八街市、16.V.2007、石塚勝巳採集)。平地流からの記録が多いので、かつては、そのような場所に生息していたものと考えられる。過去の環境評影響価調査報告などでは、本種の県内における記録はあるが、標本の確認ができないので分布から除いた。開発に伴う環境改変で生息場所が狭められていると思われる。
**【保護対策】**コンクリート護岸は幼虫の生息場所を奪うことになるため、自然性の高い河川環境を保全することが望ましい。
**【引用文献】**石綿（2005）
**【写真】**P.166

（石綿進一）

イシワタマダラカゲロウ

# トンボ目

## X　コバネアオイトトンボ　アオイトトンボ科

国：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)
千：X－X－X

*Lestes japonicus* Selys,1883

**【種の特性】**腹長28～ 33mm、後翅長18～ 22mm。同じ属のオオアオイトトンボ、アオイトトンボに似ているが、翅胸側面の金緑色部が上端で後方に延長しないことや尾部附属器の形で区別できる。幼虫は、平地から丘陵地にかけての挺水植物の豊富な古い池に限って生息する。国内では広く分布するが、産地は極めて限定され、関東地方では本県の他にも東京都、神奈川県、埼玉県、群馬県で絶滅、栃木県、茨城県でも産地が数箇所となっている。環境省レッドデータブック2007年版で絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。宮崎･松木(1992)は、本種の♀の産卵管が、オオアオイトトンボやアオイトトンボと比較するとあまり発達しておらず、組織の柔らかな挺水植物を選択して産卵することが、本種の分布を限られたものにしたのではないかと推定している。
**【分布】**本州、四国、九州および天草諸島などの離島、朝鮮半島、中国。
**【県内の状況】**野田市、我孫子市、香取郡神崎町、印旛郡の栄町、本埜村、成田市、茂原市、長生郡長生村などから記録されたが、千葉県では現在確実な産地は皆無で、20年以上採集されておらず、絶滅したものと思われる。柄澤(1992)も古い記録である。
**【保護対策】**池沼の埋立て、護岸工事や池周辺の整備による周辺林の消失、農薬散布や池の栄養化などにより絶滅したものと思われる。本種の移動距離についての詳細は不明であるが、50km圏内に産地がないので、生息環境を整えても飛来を期待することは困難と思われる。
**【引用文献】**柄澤(1992)／宮崎･松木(1992)
**【写真】**P.166

(松木和雄)

コバネアオイトトンボ

## X　アオハダトンボ　カワトンボ科

国：掲載なし
千：A－X－X

*Calopteryx japonica* Selys,1869

**【種の特性】**腹長40～ 48mm、後翅長31～ 40mm。♂の翅は藍色の光沢があり、♀の翅は褐色で白色の偽縁紋があることでハグロトンボとの区別は容易である。幼虫は、平地や丘陵地の水生植物が繁茂する清流に生息する。
**【分布】**本州、四国、九州、朝鮮半島、中国東北部、中央シベリア以東。
**【県内の状況】**本県での記録は、野田市の座生沼と本郷だけである。野田市座生沼の採集地は、アシの繁茂する湿地帯で、中央に工場廃水や生活雑廃水の流入する水路が走るような環境で、とても本種が羽化するような場所ではないと指摘されている(鈴木、1982)。現在、本種の確実な産地はない。他地域からの飛来の可能性もある。
**【保護対策】**利根川や江戸川沿いの平地や丘陵地で水生植物が繁茂する清流の保全をすることが望ましい。
**【引用文献】**柄澤(1992)／鈴木(1982)
**【写真】**P.166

(松木和雄)

アオハダトンボ

## X　エゾトンボ　エゾトンボ科

国：掲載なし
千：A－A－X

*Somatochlora viridiaenea* (Uhler,1858)

**【種の特性】**腹長37～ 51mm，後翅長37～ 44mm。胸部は，金属光沢のある緑色をしており，同属のハネビロエゾトンボに似るが，♂では尾部附属器，♀では生殖弁の形で区別できる。千葉県のものは，別亜種オオエゾトンボ*Somatochlora viridiaenea atrovirens*として扱われて来たが，石田ほか(1988)に従い、ここでは種エゾトンボとして扱う。成虫は6月中旬～9月上旬に記録されている。幼虫は，平地，丘陵地の湿地の浅い水溜まりや溝の周辺部に生育する。
**【分布】**北海道，本州，四国，九州(熊本県以北）および奥尻島、淡路島、隠岐などの離島、朝鮮半島、サハリン。
**【県内の状況】**市川市，東金市，茂原市，長生郡長生村から記録されている。約30年前までは，茂原市に生息していたが，現在確実な産地は皆無で，絶滅したものと思われる。
**【保護対策】**産地が再発見されれば，湿地の浅い水溜まりや溝と周辺林の保全が必要と思われる。
**【引用文献】**石田ほか(1988)／松木ほか(1993)
**【写真】**P.166

(松木和雄)

エゾトンボ

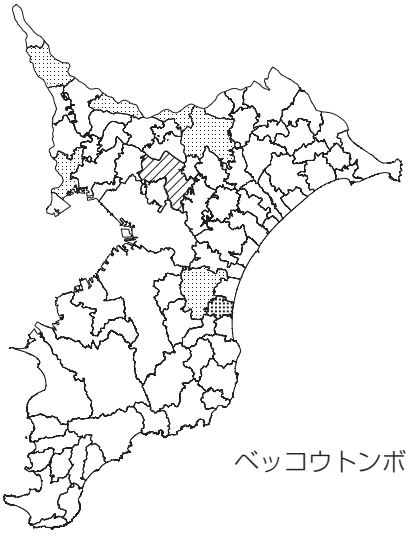
## X　ベッコウトンボ　トンボ科

国：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)
千：X－X－X

*Libellula angelina* Selys, 1883

**【種の特性】**腹長24～ 31mm、後翅長30～ 34mm。翅の縁紋、結節、基部に顕著な黒褐色紋を持つ太身のトンボ。平地のマコモ、ヨシなどの挺水植物がまばらに生える開けた浅い池沼を好む。この30年、本州、四国、九州の各県で絶滅が続いており、すでに関東地方以北で確実な産地はない。環境省レッドデータブック2007年版で絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。
**【分布】**本州(宮城県以南)、四国、九州および対馬、天草諸島などの離島、朝鮮半島、中国中部～北部に分布する。
**【県内の状況】**本県では、枝(1963)によれば、その時点で市川市じゅんさい池の本種は絶滅しているし、茂原市でも宅地開発などにより現在は絶滅してしまった。印旛沼では、1989年までは生息していた(鵜飼，2000)が、その後の調査では全く確認されておらず絶滅したものと思われる。
**【保護対策】**印旛沼ではマコモ、ヨシなどの挺水植物が繁茂した岸辺は、そのまま残っており、水質悪化などが原因と思われる。長生郡長生村水口は、1974年当時は関東地方でも屈指の本種の産地であったと思われるが、この直後数年の間に沼沢地の排水工事が行われ、沼の消滅とともに見られなくなってしまった。他県でのマーキング調査によると本種の移動距離は、数百mから数kmである。50km圏内に産地がなくなった現在、生息環境を整えても飛来を期待することは困難と思われる。
**【引用文献】**枝(1963)／松木ほか(1993)／鵜飼(2000)
**【写真】**P.166

(松木和雄)


ベッコウトンボ

## X　ミヤマアカネ　トンボ科

国：掲載なし
千：A－X－X

*Sympetrum pedemontanum elatum* (Selys,1872)

**【種の特性】**腹長23～ 28mm、後翅長26～ 31mm。翅の縁紋付近に幅広い褐色帯があるアカネで、他種との区別は容易である。成虫は、7月上旬～11月下旬に記録されている。他県の例では、幼虫は主として丘陵地、低山地の水田地帯、湿原の緩やかな流れなどに生息する。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州および国後島、奥尻島、佐渡島などの離島、朝鮮半島南部。
**【県内の状況】**本県では、野田市、我孫子市、松戸市、市川市、夷隅郡大多喜町から記録されているが、現在確実な産地はなく、20年近く記録されていない。他県では、希少種に含まれることは少ない種であるが、本県でもともと少なかった理由は不明である。
**【保護対策】**丘陵地、低山地の水田環境の保全だけでは本種を呼び戻すのは困難と思われ、一旦減少してしまったら、保護対策が難しい種であると思われる。
**【引用文献】**柄澤(1992)
**【写真】**P.166

(松木和雄)

ミヤマアカネ

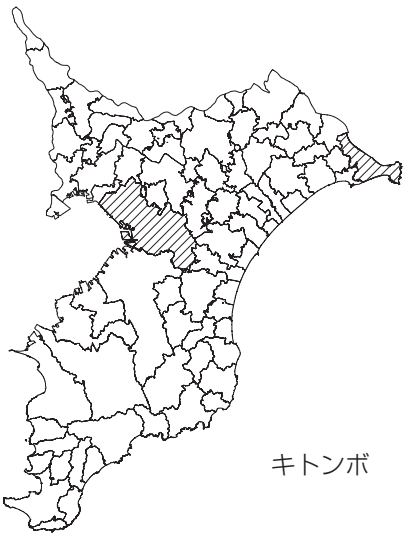
## X　キトンボ　トンボ科

国：掲載なし
千：A－A－X

*Sympetrum croceolum* (Selys,1883)

**【種の特性】**腹長24～ 29mm、後翅長25～ 32mm。胸部･腹部ともに橙黄色で無斑のアカトンボで、翅前縁沿いに濃橙色部がある。他県では、平地･丘陵地の木立のある池に生息するが、本県での詳細は不明。国内では、広く分布するが産地は局地的である。関東地方では、本県の他に東京都、神奈川県で絶滅している。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州および淡路島、天草諸島などの離島、朝鮮半島、中国中部～東北部、シベリア。
**【県内の状況】**千葉市(直海･山田,1997)と銚子市(若菜･若菜,1984)で記録されているだけでもともと確実な生息地は皆無である。定着種かどうかも不明。10年以上記録されておらず、絶滅種としてとりあげる。
**【保護対策】**他県では、平地･丘陵地の木立のある池に生息するので、県境域、特に利根川沿いの溜池への飛来や発見が期待される。
**【引用文献】**直海･山田(1997)／若菜･若菜(1984)
**【写真】**P.166

(松木和雄)


キトンボ

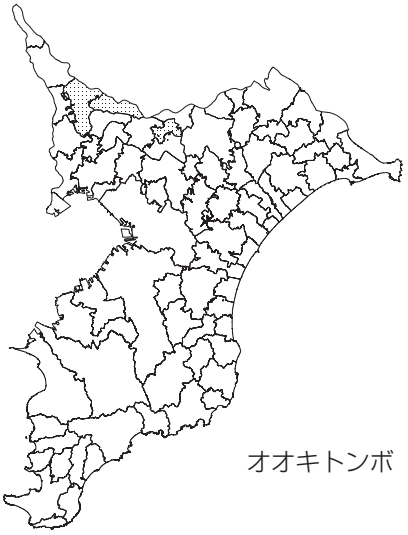
## X　オオキトンボ　トンボ科

国：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)
千：X－X－X

*Sympetrum uniforme* (Selys,1883)

**【種の特性】**腹長30～ 36mm、後翅長32～ 39mm。日本産のアカトンボ属中で最も大型の種で、全体が橙黄色で無斑。翅も半透明で全体に橙黄色。平地から丘陵地にかけてのヨシなどが繁茂する大きく開けた浅い池沼に限って生息する。全国的に激減している種で、関東地方では、本県の他に東京都、神奈川県では絶滅、他の県でも産地は極めて限定され数箇所以下である。環境省レッドデータブック2007年版で絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。
**【分布】**本州、四国、九州、朝鮮半島、中国北部～東北部。
**【県内の状況】**本県では、柏市手賀沼(古川，1943)、我孫子市古戸(根本，1967)、印旛郡本埜村甚兵衛(枝，1965）の3例が報告されているだけで、その後40年以上確実な記録がなく絶滅したものと思われる。
**【保護対策】**本種は、環境選択性が強く、生息する池沼のわずかな環境変化にも反応してその場所を見捨てる可能性が高いという(碓井,1996)。40km圏内に産地がなくなった現在、生息環境を整えても飛来を期待することは困難と思われる。
**【引用文献】**枝(1965）／古川(1943）／根本(1967）／碓井(1996)
**【写真】**P.167

（松木和雄）


オオキトンボ

## A　ヒヌマイトトンボ　イトトンボ科

国：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)
千：A－A－A

*Mortonagrion hirosei* Asahina,1972

**【種の特性】**腹長23～ 25mm、後翅長13～ 16mmの小型のイトトンボ。♂の翅胸前面の淡色条が上下2つに分断されることで同じ属のモートンイトトンボと区別できる。市川自然博物館(1992) は、具体的なデータは示していないものの、生息環境は高さ2mを越すヨシが生い茂るうっそうとした環境で、足元は柔らかな泥地であり、ヨシ原の奥の浅い流れや波の影響のない静かな水路で幼虫やその羽化を見たことを述べている。本州の産地は各県とも多いところでも数箇所以下で、河川改修工事等、生息環境の破壊によって既に絶滅してしまった産地も多い。環境省レッドデータブック2007年版で絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。
**【分布】**本州(宮城県以南)、九州(大分県のみ)、対馬、香港。
**【県内の状況】**市川市の江戸川で1箇所、香取郡東庄町の利根川などに2箇所の産地がある。市川市の本種は、市の天然記念物に指定されており、採集禁止である。朝比奈(1982)は、市川市江戸川の本種を『当該地域に於いて絶滅の危険に瀕している種』に含め、理由として河川改修を挙げている。
**【保護対策】**本種幼虫の生息には、生息域のヨシ原の確保だけでなく、浸出水のある場所の保全が極めて重要である。
**【引用文献】**朝比奈(1982）／市川自然博物館(1992）／松本･宮崎･斉藤(1993)
**【写真】**P.167

（松木和雄）

ヒヌマイトトンボ

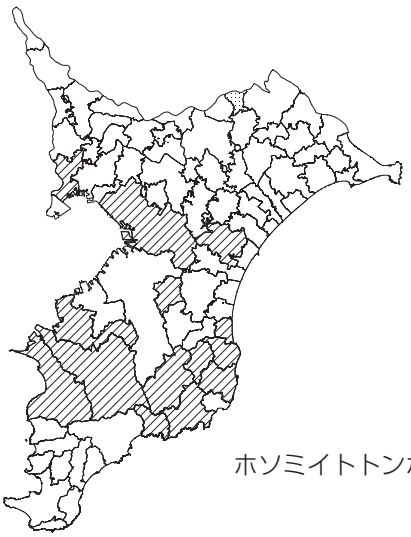
## A　ホソミイトトンボ　イトトンボ科

国：掲載なし
千：A－A－A

*Aciagrion migratum* (Selys,1876)

**【種の特性】**腹長24～ 31mm、後翅長15～ 22mm。胸部が小さく、腹部が細長いイトトンボで他種との区別は容易である。本種は、夏だけにみられる個体群(夏型）と夏羽化して成虫越冬し、翌春交尾･産卵する越冬型の2型が知られ、夏型のほうが小型。平地、丘陵地の挺水植物が繁茂した池沼や湿地の滞水、水田などに生息する。枝(1959)は、本種が「清澄山には多産し、7月に夏型、9月に越冬型が必ず採集できる」と述べていることから、以前はかなりの個体数がいたものと思われるが、現在は減少著しく、県内で多数の個体を得られる場所はない。
**【分布】**本州(新潟県以南)、四国、九州および対馬、五島列島、天草諸島、種子島、屋久島、沖永良部島などの離島、台湾、中国中部。
**【県内の状況】**本県では、香取郡神崎町、市川市、千葉市、東金市、木更津市、君津市、富津市、長生郡(一宮町、長柄町)、いすみ市、夷隅郡大多喜町、勝浦市、鴨川市などから記録されているが、移動性が高く、記録地が産地とは限らない。現存する確実な産地は数箇所のみである。最近、千葉市各地から記録されるようになった (互井，2009a) 。近隣の神奈川県と山梨県では近年本種が生息域を拡大しているとの報告もあり、本県でも同様の傾向がみられるのか今後調査が必要と思われる。
**【保護対策】**激減の理由は、池沼の埋立て、護岸工事による挺水植物の消失、農薬散布や池の栄養化などによるものと思われる。産地の周辺林を含めた現状のままの保全が望ましい。
**【引用文献】**枝(1959)／斉藤(2002)／斉藤(2010)／鈴木(2010b)／互井(2009a)
**【写真】**P.167

（松木和雄）


ホソミイトトンボ

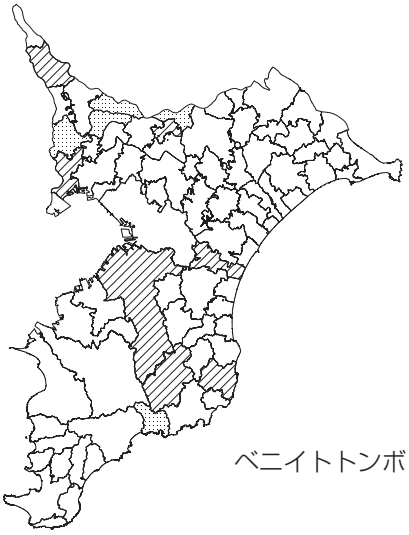
## A　ベニイトトンボ　イトトンボ科

国：絶滅危惧Ⅱ類（ＶＵ）
千：Ａ－Ａ－Ａ

*Ceriagrion nipponicum* Asahina, 1967

**【種の特性】** 腹長27～ 33mm、後翅長18～ 23mm。♂は、成熟すると胸部･腹部全体が赤色になる。成虫は、平地の挺水植物の多い比較的古い池沼に生息する。国内では、広く分布するが、産地は各県とも数箇所以下で近年の減少が顕著な種である。また、九州南部では、リュウキュウベニイトトンボの侵入が進んでおり、本種は駆逐される傾向がみられる。環境省レッドデータブック2007年版で絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。
**【分布】** 本州(宮城県以南)、四国、九州および天草諸島などの離島、朝鮮半島、中国中部。
**【県内の状況】** 野田市、柏市、我孫子市、印旛郡(本埜村、栄町)、松戸市、市川市、山武郡大網白里町、市原市、いすみ市、夷隅郡大多喜町、鴨川市から記録されている。枝(1966) は、本種が、関東では利根川、江戸川、荒川流域のみに産することを指摘しているが、その後半島部からも記録されている。朝比奈(1982) は、千葉県の本種を『当該地域に於いて絶滅の危険に瀕している種』に含め、池沼の汚染を原因として挙げている。印旛沼周辺では1987年以降記録されていない(宮崎･松木,1992)。また、鴨川市清澄山の記録は、再確認が必要と思われる。
**【保護対策】** 埼玉県の平地の沼池は、埋立てによる消滅、農薬や廃水の流入、釣りブームによる水生植物の除去、釣り餌の多用による水質の悪化などが生息地の激減を引き起こしていると指摘されており(碓井、1996)、千葉県も同様の傾向がみられる。残る数箇所の産地の水質も含めた現状保全が望ましい。
**【引用文献】** 枝（1966）／宮崎･松木（1992）／鈴木(2001a) ／鈴木(2010a)／互井(2005)／互井(2008)
**【写真】** P.167

（松木和雄）


ベニイトトンボ

## A　オオセスジイトトンボ　イトトンボ科

国：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)
千：Ａ－Ａ－Ａ

*Paracercion plagiosum* (Needham,1930)

**【種の特性】** 腹長29～ 37mm、後翅長21～ 27mm。大型のイトトンボで、♂は成熟するとコバルトブルー、♀は黄緑色になる。幼虫は、挺水植物、浮葉植物、沈水植物のある古い池沼のマコモやヨシの繁茂する部分に生息する。未成熟♂は、発生地脇の草原の中に潜むが、印旛村での観察では岸辺から３m～10m以内であり、ほとんど発生地から離れない。また、同属のセスジイトトンボ、クロイトトンボ、ムスジイトトンボの♂は、浮葉植物の葉や沈水植物の水面に盛り上がった部分に静止し、水面すれすれに飛び回るが、本種♂は比較的挺水植物の繁茂した場所にいて、それに静止し、挺水植物の間や周辺を飛び回る傾向がある(宮崎･松木,1992)。関東地方では近年激減しており、2007年の環境省レッドデータブック改訂版で絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。
**【分布】** 本州(東北地方、新潟県、関東地方のみ)、朝鮮半島、中国北部･中部。
**【県内の状況】** 本県では、利根川、江戸川沿いの池沼（野田市、我孫子市、印旛郡栄町･本埜村･印旛村、佐倉市、市川市、東金市、山武郡横芝光町）と、いすみ市から記録されているが、現存する産地は県内では数箇所のみとなってしまった。
**【保護対策】** 本種の生息には、沈水植物、浮葉植物、挺水植物という沿岸帯のセットが必要であり、しかも生息地で一度水抜きをしてしまうと、植物は再生しても本種は継続発生しない傾向がみられる。残る数箇所の産地の水質も含めた環境保全が望ましい。
**【引用文献】** 宮崎･松木(1992)
**【写真】** P.167

（松木和雄）

オオセスジイトトンボ

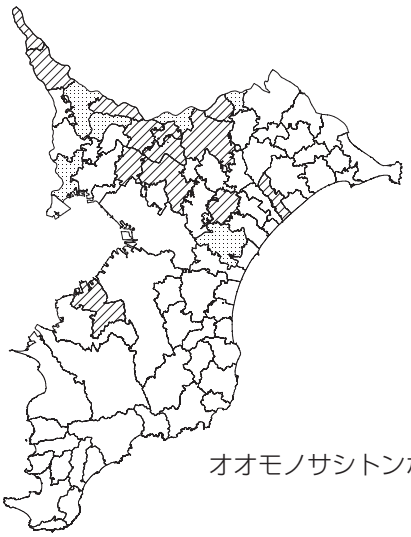
## A　オオモノサシトンボ　モノサシトンボ科

国：絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)
千：Ａ－Ａ－Ａ

*Copera tokyoensis* Asahina,1948

**【種の特性】** 腹長33～ 37mm、後翅長21～ 26mm。モノサシトンボに似るが、翅胸部の前肩条は♂では消滅するものが多い。また、腹部末端の淡色部は、本種のほうが少ない。幼虫は、ヨシ、マコモなどの挺水植物の多い池、用水路に生息する。宮崎･松木(1992) は、印旛沼での年２化を推定している。未成熟成虫は、ヨシ、マコモ群落の岸側の縁や、釣人などにより踏みつけられて出来た空間の、地上50cm程度の低い位置にある葉や茎に止まっている。移動する時もヨシの間を縫うようにして飛ぶことが多い。環境省レッドデータブック2007年版で絶滅危惧Ⅰ類に指定されている。
**【分布】** 本州(新潟県、宮城県、関東地方の一部)、朝鮮半島、中国(揚子江流域)。
**【県内の状況】** 野田市、柏市、我孫子市、印旛郡(栄町、本埜村、印旛村)、印西市、成田市、香取郡神崎町、市川市、八千代市、佐倉市、山武郡横芝光町、東金市、袖ヶ浦市から記録されている。千葉県では、江戸川、利根川流域と袖ヶ浦市にのみ分布する。朝比奈(1982)は、千葉県の本種を『当該地域に於いて絶滅の危険に瀕している種』に含め、「千葉では広範に分布するが、どこでも減少している」と述べている。
**【保護対策】** 激減の理由は、池沼の埋立て、護岸工事による挺水植物の消失、農薬散布や池の富栄養化などによるものと思われる。房総の生物編集委員会(1985)は、野田市周辺で、かつての多産地が釣堀になり、本種が減少していることを指摘している。残る数箇所の産地の水質も含めた環境保全が望ましい。
**【引用文献】** 朝比奈（1982）／房総の生物編集委員会（1985）／（1982）宮崎･松木(1992)
**【写真】** P.167

（松木和雄）


オオモノサシトンボ

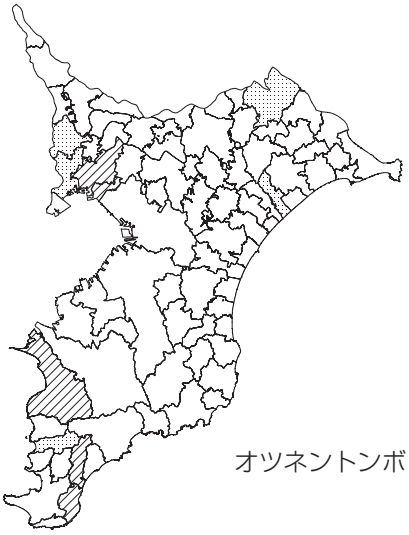
## A　オツネントンボ　アオイトトンボ科

*Sympecma paedisca* (Brauer,1877)

国：掲載なし
千：A－A－A

**【種の特性】**腹長26～ 31mm、後翅長20～ 24mm。淡褐色の地に銅色の斑紋のある腹部が太いイトトンボで、成虫越冬することが知られている。幼虫は、平地や低山地の挺水植物の繁茂する池沼、湿地などに生息する。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州（北部）および奥尻島、佐渡島、淡路島、壱岐、対馬、五島列島などの離島、朝鮮半島、中国北部・東北部、中央ヨーロッパ、中央アジア。
**【県内の状況】**松戸市、船橋市、習志野市、市川市、佐原市、山武郡横芝光町、富津市、南房総市などの11箇所から記録されているが、1960年代までの記録がほとんどで、現在確実な産地は皆無である。ただし、隣接する東京都江戸川区で2008年に記録されており（斉藤・加藤，2010）、本県での生息の可能性も考えられるため、今回はAランクに留めておく。
**【保護対策】**本種が飛来しても生育できるような平地や低山地の挺水植物の繁茂する池沼、湿地などの周辺林とセットの保全が望ましい。
**【引用文献】**松木ほか（1993）／斉藤・加藤(2010)
**【写真】**P.167

（松木和雄）


オツネントンボ

## A　ミヤマサナエ　サナエトンボ科

*Anisogomphus maacki* (Selys,1872)

国：掲載なし
千：A－A－A

**【種の特性】**腹長39～41mm、後翅長31～33mm。腹部7～9節が著しく広がった中型のサナエトンボ。幼虫は、河川の中流・下流域の流れの緩やかな砂泥底に生息する。未成熟成虫は羽化域をはるかに離れて山地の尾根筋などに移動して生活することが知られている。千葉県下では成熟成虫は採集されていない。斉藤（1991b）は、江戸川での羽化域調査で羽化観察をしている。
**【分布】**本州、四国、九州、朝鮮半島、中国東北部、アムール、イルクーツク。
**【県内の状況】**江戸川下流域（市川市）で記録されているだけである。
**【保護対策】**生息河川中流・下流域で多量の悪質な廃水流入を防止することや大規模な河川改修の際には、川岸に砂泥底が残るような多自然型工法を用いるなどの注意をすることが望ましい。
**【引用文献】**斉藤（1991b）
**【写真】**P.167

（松木和雄）

ミヤマサナエ

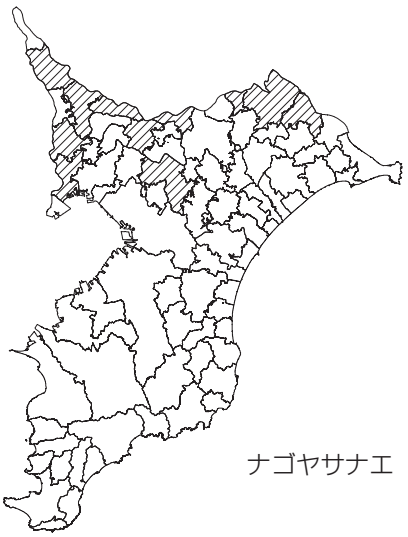
## A　ナゴヤサナエ　サナエトンボ科

*Stylurus nagoyanus* (Asahina,1951)

国：準絶滅危惧（ＮＴ）
千：A－A－A

**【種の特性】**腹長42～ 46mm、後翅長33～ 37mm。大型のサナエで、ミヤマサナエと同じく♂の腹部の第7～9節が横に強く広がるが、腹面は鮮黄色なので容易に区別できる。幼虫は、河川の中流・下流域の流れの緩やかな砂泥底に生息する。羽化殻・成虫は、6月上旬～9月上旬に記録されているが、斉藤（1991a）によれば、江戸川流域では、6月下旬と7月下旬～8月上旬の2つの発生ピークが認められるという。環境省レッドデータブック2007年版で準絶滅危惧種に指定されている。
**【分布】**本州（東北地方南部以南）四国、九州（熊本県以北）。日本固有種。
**【県内の状況】**野田市、我孫子市、柏市、松戸市、市川市、印旛郡栄町、佐倉市、佐原市、香取郡神崎町、香取市から記録されている。江戸川流域と利根川流域とそれらに接続する運河から得られているだけである。利根川では、香取市から河口75㎞の印西市木下にかけて羽化殻が得られている。
**【保護対策】**生息河川中流・下流域で多量の悪質な廃水流入を防止することや大規模な河川改修の際には、川岸に砂泥底が残るような多自然型工法を用いるなどの注意をすることが望ましい。
**【引用文献】**斉藤（1991a）／斉藤・緒方(2002)／互井(2002)
**【写真】**P.167

（松木和雄）


ナゴヤサナエ

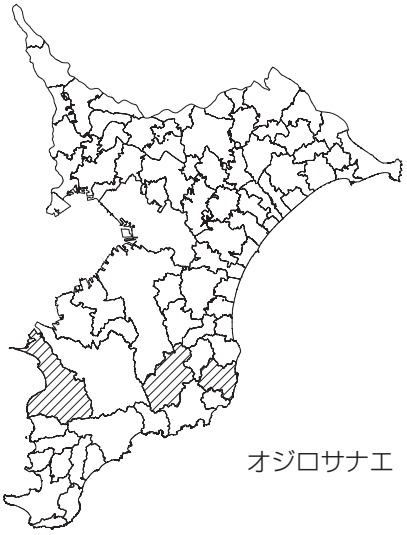
## A　オジロサナエ　サナエトンボ科

*Stylogomphus suzukii* (Oguma,1926)

国：掲載なし
千：A－A－A

**【種の特性】**腹長30～ 32mm、後翅長22～ 25mm。胸部側面にY字形の黒条のある小型のサナエトンボで、♂の尾部上附属器が白いのが特徴である。幼虫は、低山地、丘陵地の渓流の岸近くの砂礫底に生息する。成虫は、6月中旬～9月下旬に記録されている。本県では、幼虫も個体数は多くない。
**【分布】**本州、四国、九州および淡路島、隠岐、五島列島、天草諸島などの離島。日本固有種。
**【県内の状況】**房総丘陵の富津市といすみ市、夷隅郡大多喜町からのみ記録されている。
**【保護対策】**産地の渓流と行動圏である周辺林の保全が必要である。
**【引用文献】**鈴木(2001b)
**【写真】**P.167

（松木和雄）


オジロサナエ

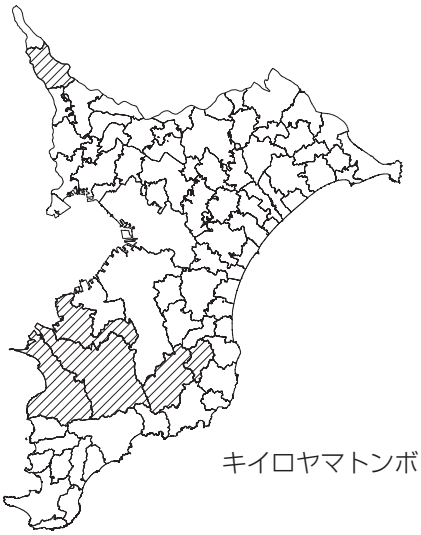
## A　キイロヤマトンボ　エゾトンボ科

*Macromia daimoji* Okumura,1949

国：準絶滅危惧（NT）
千：A－A－A

**【種の特性】**腹長54～ 64mm、後翅長44～ 62mm。コヤマトンボに良く似ているが、腹部の斑紋や尾部附属器の形で区別できる。全国的に減少が顕著で、産地は極めて限定される。環境省レッドデータブック2007年版で準絶滅危惧に指定されている。幼虫は、丘陵地や低山地の清流中の流れの緩やかな砂底に生息する。
**【分布】**本州(福島県以南)、四国、九州、朝鮮半島南部。
**【県内の状況】**野田市、君津市、木更津市、富津市、いすみ市、夷隅郡大多喜町から記録されているだけである。養老川、小櫃川、夷隅川などとその支流で幼虫が得られている。
**【保護対策】**清流中の流れの緩やかな砂底に生息しており、産地の保全は極めて難しいが、護岸工事や周辺林の伐採には配慮が必要である。
**【引用文献】**平澤(2003b)／松木・加納(2000)／松木・加納・木村(2002)／西田(1999)／互井(2005)
**【写真】**P.167

（松木和雄）


キイロヤマトンボ

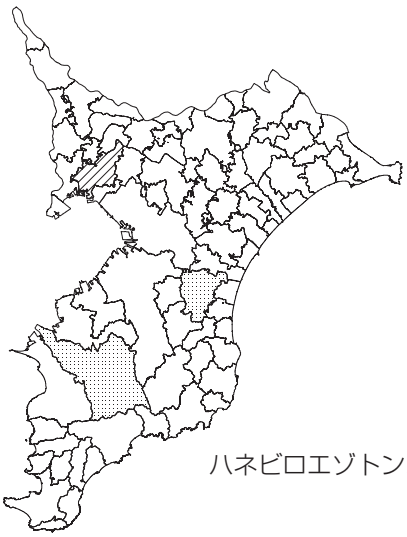
## A　ハネビロエゾトンボ　エゾトンボ科

*Somatochlora clavata* Oguma,1913

国：絶滅危惧Ⅱ類（VU）
千：A－A－A

**【種の特性】**腹長41～ 50mm、後翅長40～ 45mm。同属のエゾトンボに似るが、♂では尾部附属器、♀では生殖弁の形で区別できる。成虫は7月中旬と8月中旬の記録がある。幼虫は、平地、丘陵地の細流を伴う湿地に生息する。環境省レッドデータブック2007年版で絶滅危惧Ⅱ類に指定されている。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州および佐渡島、淡路島、隠岐、対馬、天草諸島などの離島。朝鮮半島。
**【県内の状況】**本県では、県中央部の茂原市と君津市からそれぞれ1例記録されているだけで、その後40年近く追加記録がなかったが、1997年に船橋市で1幼虫が採集され(松木,1998)、さらに君津市でも幼虫が得られた(西田，2008)。しかし、その後の調査でいずれの産地でも継続発生は確認できず、現在確実な産地はない。
**【保護対策】**平地、丘陵地の細流を伴う湿地に生息するので、新たに産地が発見された場合は、そのような環境をまるごと保全することが望ましい。
**【引用文献】**松木(1998)／西田(2008)
**【写真】**P.167

（松木和雄）


ハネビロエゾトンボ

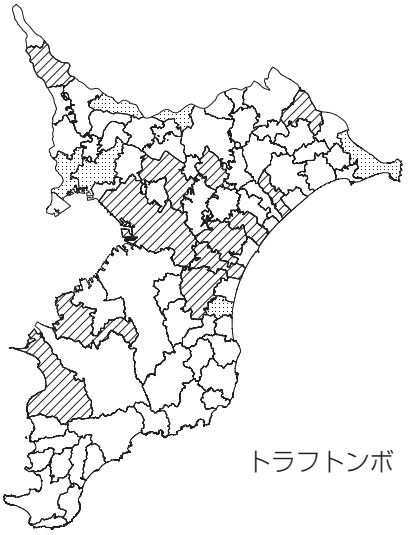
## A　トラフトンボ　エゾトンボ科

国：掲載なし
千：A－A－A

*Epitheca marginata* (Selys,1883)

**【種の特性】**腹長34～ 39mm、後翅長33～ 38mm。黒色と橙褐色の虎斑模様をした中型のトンボで、♀の翅の前縁に沿って黒褐色の帯条がある。成虫は、4月中旬～6月上旬に記録されている。平地、丘陵地の浮葉植物の繁茂する深くて大きい池沼に生息する。
**【分布】**本州、四国、九州および淡路島、隠岐、天草諸島などの離島、朝鮮半島、中国。
**【県内の状況】**野田市、我孫子市、印西市、印旛郡栄町、佐倉市、香取市、銚子市、市川市、船橋市、千葉市、山武郡横芝光町、山武市、山武郡大網白里町、東金市、茂原市、長生郡長生村、木更津市、富津市から記録されているが、現在、確実に残っている産地は数箇所のみである。
**【保護対策】**本種の減少は、池沼の埋立て、農薬散布や池の富栄養化などによるものと思われる。現存する産地の保全にはそれを防ぐ配慮が必要である。
**【引用文献】**古城(2003) ／松井· 松井(2001)／中山· 阿部(2001) ／西田(1999)
**【写真】**P.168

（松木和雄）



トラフトンボ

## A　ヨツボシトンボ　トンボ科

国：掲載なし
千：A－A－A

*Libellura quadrimaculata asahinai* Schmidt,1957

**【種の特性】**腹長24～ 31mm、後翅長33～ 39mm。胸部· 腹部は黄褐色で腹部は太く、背面に黒斑を有する。後翅の基部と結節部に黒斑がある。成虫は、4月下旬～6月下旬に記録されている。幼虫は、平地、丘陵地の挺水植物の多い池沼や湿地に生息する。
**【分布】**南千島、北海道、四国、九州および択捉島、国後島、利尻島、奥尻島、佐渡島、淡路島、家島諸島、隠岐、天草諸島などの離島。日本固有亜種。
**【県内の状況】**野田市、印西市、市川市、茂原市、習志野市、長生郡長生村から記録されているが、現在残っている産地は印西市1箇所のみである。
**【保護対策】**唯一の確実な産地である印西市の池を現状のまま保全することが望ましい。
**【引用文献】**木村(2010) ／斉藤(1997)
**【写真】**P.168

（松木和雄）

ヨツボシトンボ

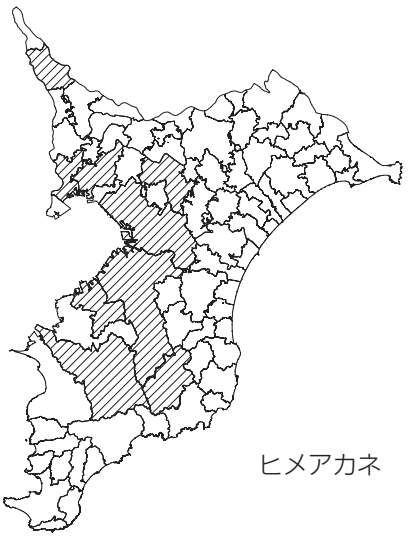
## A　ヒメアカネ　トンボ科

国：掲載なし
千：A－A－A

*Sympetrum parvulum* (Bartenef,1912)

**【種の特性】**腹長19～ 25mm、後翅長20～ 27mm。マユタテアカネを小型にしたようなアカネで、♂は成熟すると顔面が白色となる。マユタテアカネとは翅胸前面の黒斑や尾部附属器の形などで区別できる。成虫は、8月上旬～ 10月中旬に記録されている。幼虫は、平地、丘陵地、低山地の水生植物の繁茂する滲出水のある湿地や木立のある廃田、荒廃した農業用水池などに生息する(宮崎· 松木、1992)。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州および淡路島、対馬、天草諸島などの離島、朝鮮半島、中国北部· 東北部、ウスリー。
**【県内の状況】**野田市、市川市、佐倉市、船橋市、千葉市、市原市、袖ケ浦市、君津市、夷隅郡大多喜町などから記録されている。本県では野田市での記録がやや多い他は産地も局地的で、個体数も多くない。市川市の本種は、1976年に市の天然記念物に指定されたが、産地であった大町公園自然観察園ですでに確認されなくなって久しい。
**【保護対策】**市川市大町公園自然観察園は、採集禁止にして、かつ環境を保全しても守れなかった事例で、本種の生息環境保全の難しさを物語っている。産地となっている丘陵地、低山地の水生植物の繁茂する滲出水のある湿地の保全が望ましい。
**【引用文献】**柄澤（1992）／宮崎· 松木(1992）／互井(2009e)
**【写真】**P.168

（松木和雄）



ヒメアカネ

## A　ネキトンボ　トンボ科

*Sympetrum speciosum speciosum* Oguma,1915

国：掲載なし
千：A－A－A

**【種の特性】**腹長25～ 28mm、後翅長32～ 37mm。翅の基部は鮮やかな橙赤色で、胸部側面に太い黒条があるアカネ。丘陵地や低地の林に囲まれた水深のある池沼に生息する。産地は、南西日本に比較的多い。完全に人工的な水域からも発生し、市川市では小学校プールから複数回発見されている(互井,2009d)。

**【分布】**本州(福島県、新潟県以南)、四国、九州および淡路島、隠岐、対馬、五島列島、天草諸島、甑島列島、屋久島、トカラ列島などの離島。日本固有亜種。

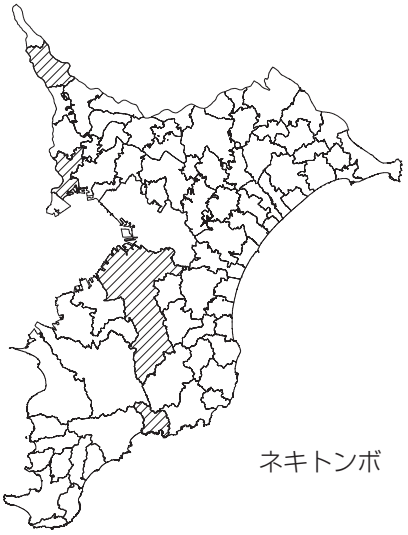
**【県内の状況】**野田市、市川市、市原市、鴨川市から記録されているだけである。

**【保護対策】**安定した産地は、鴨川市の１箇所のみで、同所の現状のままの保全が望ましい。

**【引用文献】**柄澤（1992）／清水(1995）／互井(2009d)

**【写真】**P.168

（松木和雄）



ネキトンボ

## A　アサヒナカワトンボの地域個体群（シロバネカワトンボ）　カワトンボ科

*Mnais pruinosa* Selys,1853 forma *edai*

国：絶滅のおそれのある地域個体群（LP）
千：A－A－A

**【種の特性】**腹長35～ 46mm、後翅長31～ 40mm。アサヒナカワトンボの１型で翅が不透明化し白色になった個体。房総半島南部の一部のみにみられる。橙色翅♂、透明翅♂、透明翅♀のいずれでもみられる。枝･他(1970）によりシロバネカワトンボ、Asahina(1976)によりforma *edai*と命名された。枝(1965）は、顕微鏡でf. *edai*の翅の構造を観察し、不透明斑が異常に発達したものと考察。大野(1974) は、シロバネカワトンボを房総固有要素とし、1）富山、高宕山、鋸山、大坪山で記録されていること、2）高宕山ではシロバネカワトンボの比率が原型より多いこと、3）富山では非常に少なく、年々減少傾向が見られること、4)その原因が採集家によるシロバネカワトンボの選択採集と思われることなどを指摘している。実際に、高宕山での調査では、1964年は90%以上がシロバネカワトンボであった(枝、1965）が、1991年の調査では、比率はおよそ１割程度にまで減少した。幼虫は、渓流に生息する。環境省レッドデータブック2007年版でトンボ類で唯一「地域個体群」に指定されている。

**【分布】**房総半島南部のみ。

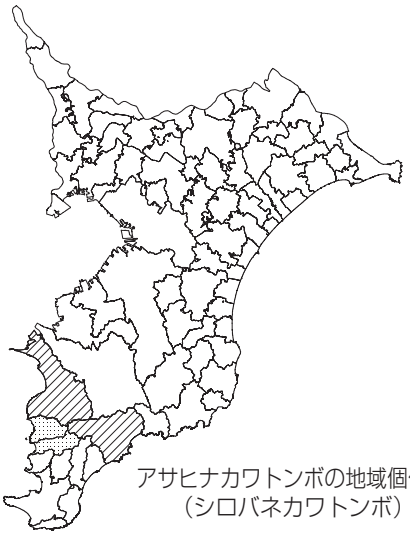
**【県内の状況】**富津市、安房郡鋸南町、鴨川市、南房総市からのみ記録されているが、産地での個体数は、激減しており、場所によっては全くみられなくなった(枝,2007)。

**【保護対策】**人為乱獲の影響が顕著なので、法令によるf.*edai*の採集禁止もやむなしと思われる。

**【引用文献】**Asahina(1976)／枝 (1965b) ／枝(2007）／二橋･林(2004) ／大野(1974)／若菜(1994)

**【写真】**P.168

（松木和雄）



アサヒナカワトンボの地域個体群（シロバネカワトンボ）

## B　モートンイトトンボ　イトトンボ科

*Mortoagrion selenion* (Ris,1916)

国：準絶滅危惧（ＮＴ）
千：B－A－B

**【種の特性】**腹長17～ 24mm、後翅長11～ 16mm。♂は成熟すると腹部の先端が橙色になる。平地および丘陵地の草の多い浅い湿地や休耕田･廃田に生息する(宮崎･松木,1992)。高知県では年２化で、４月下旬から９月下旬まで見られる(浜田･井上,1985）が、千葉県での発生の詳細は不明である。環境省レッドデータブック2007年版で準絶滅危惧種に指定されている。

**【分布】**北海道南端、本州、四国、九州、朝鮮半島、沿海州、中国中部。

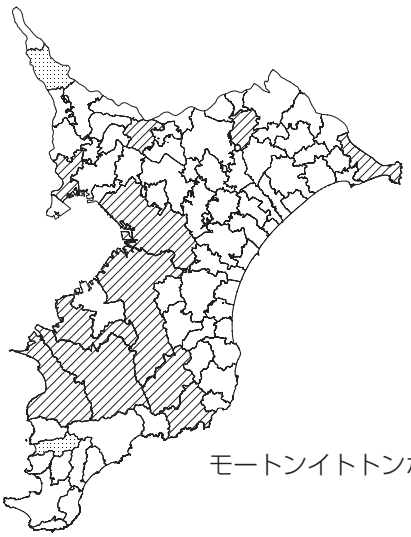
**【県内の状況】**野田市、印西市、市川市、成田市、銚子市、千葉市、市原市、君津市、木更津市、夷隅郡大多喜町、富津市、勝浦市、南房総市とほぼ全域から記録されているが、産地は極めて限定されており、現在確実な産地は10箇所以下である。

**【保護対策】**休耕田が湿地化した産地では、乾燥化や埋立てにより消滅することも珍しくなく、本種の保護には、発生している湿地の保全が不可欠である。

**【引用文献】**浜田･井上(1985）／松井･松井(2001)／宮崎･松木(1992)／中山･阿部(2001)

**【写真】**P.168

（松木和雄）



モートンイトトンボ

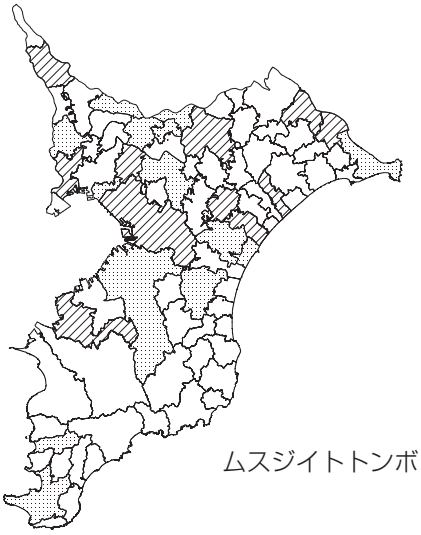
## B　ムスジイトトンボ　イトトンボ科

*Paracercion melanotum* (Selys,1876)

国：掲載なし
千：B－B－B

**【種の特性】**腹長21～ 25mm、後翅長14～ 17mm。同じ属のオオイトトンボやセスジイトトンボに酷似しているが、尾部附属器の形や頭部、翅胸の斑紋などで区別できる。幼虫は、沈水植物の繁茂した開放的な池沼に生息する(宮崎・松木,1992)。成虫は、5月上旬～ 10月下旬に記録されているが、宮崎・松木(1992)は、印旛沼周辺では採集記録が9月を中心にした2カ月に集中していることを指摘し、南方系の本種は比較的内陸の印旛沼周辺では越冬出来る個体が少ないため、春の第1化は少なくなり、次の2化目で増えるのではないかと推定している。また、互井(2004a)は、市川市の本種の産地を例に水域の発生後すぐに生息が確認されることから、本種の移動性が高いことと、その移動は、河川を「回廊」として使用しているのではないかと推測している。
**【分布】**本州(宮城県以南)、四国、九州および壱岐、五島列島、天草諸島、甑島列島、南西諸島などの離島、台湾、大連、中国中南部、ベトナム。
**【県内の状況】**県内全域から記録されている。枝(1959)は、内房・外房とも海岸寄りの沼に広く分布することを指摘している。しかし、現在の確実な産地は10箇所以下となった。
**【保護対策】**産地である海岸寄りの沈水植物の繁茂した開放的な池沼とその周囲の草原の保全が必要である。
**【引用文献】**枝(1959)／宮崎・松木(1992) ／互井(2004a)／互井(2009b)
**【写真】**P.168

(松木和雄)



ムスジイトトンボ

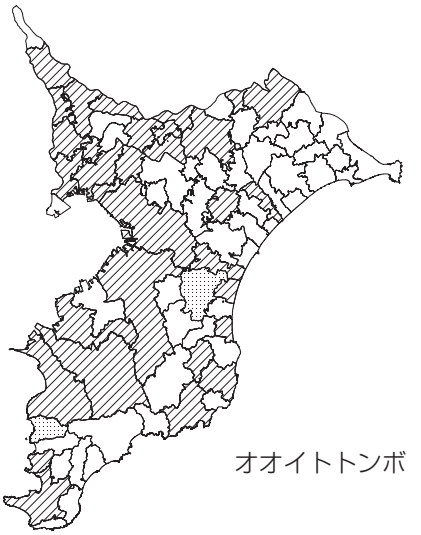
## B　オオイトトンボ　イトトンボ科

*Paracercion sieboldii* (Selys,1876)

国：掲載なし
千：D－D－B

**【種の特性】**腹長22～ 29mm、後翅長22～ 29mm。ムスジイトトンボ、セスジイトトンボに良く似ているが、頭部や胸部の斑紋、尾部附属器の形などで区別できる。成虫は、5月上旬～9月下旬に記録されている。幼虫は、本県では、平地や丘陵地の挺水植物の多い池沼や小さな湿地、緩やかな細流に生息する(宮崎・松木, 1992)。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州および佐渡島、淡路島、隠岐、壱岐、対馬、五島列島、天草諸島、甑島列島などの離島、台湾。
**【県内の状況】**千葉県では、全域から記録されているが、近年急激に減少している。
**【保護対策】**現存産地の池沼を周囲の草原とともにそのまま保全することが望ましい。
**【引用文献】**阿部(2000)／松井・松井(2001) ／ 宮崎・松木(1992)
**【写真】**P.168

(松木和雄)



オオイトトンボ

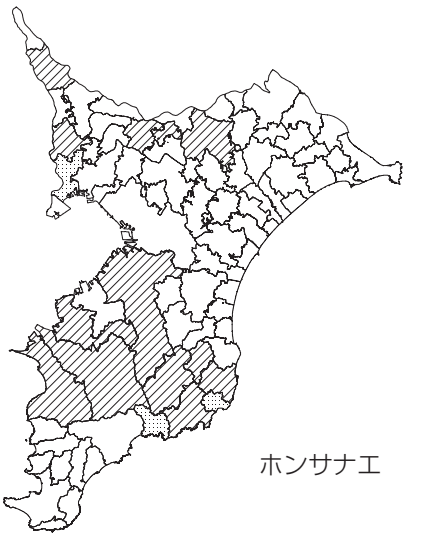
## B　ホンサナエ　サナエトンボ科

*Gomphus postocularis* Selys,1869

国：掲載なし
千：B－B－B

**【種の特性】**腹長33～ 36mm、後翅長29～ 32mm。腹部が太く短いサナエトンボで、他種との区別は容易である。幼虫は、平地、丘陵地の河川中流域と水田脇にある泥質の細流の川底に生息する。産地はかなり限定される。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州(熊本県まで) および佐渡島、朝鮮半島。
**【県内の状況】**野田市、成田市、印西市、印旛郡本埜村、松戸市、市川市、市原市、君津市、木更津市、富津市、いすみ市、夷隅郡大多喜町、鴨川市、勝浦市から記録されている。江戸川周辺と北総台地でいくつかの記録がある以外は、半島部の房総丘陵に産地が集中している。
**【保護対策】**産地および産地の上流域での河川改修による環境変化や水質汚濁による生息地の消滅が心配される。産地の河川改修や用水路の護岸工事は、部分施工にするなど十分な配慮が必要である。
**【引用文献】**松井・松井(2001) ／松木ほか(2003)／中山・阿部(2001)
**【写真】**P.168

(松木和雄)



ホンサナエ

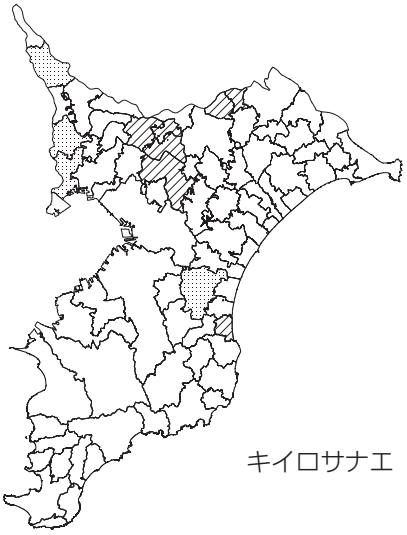
## B　キイロサナエ　サナエトンボ科

国：掲載なし
千：B－B－B

*Asiagomphus pryeri* (Selys,1883)

**【種の特性】**腹長43～ 49mm、後翅長37～ 42mm。ヤマサナエに似ているが、♂は尾部附属器、♀は生殖弁の形で区別できる。幼虫は、河川の中流域や丘陵地の水田や湿地脇にある、川幅１～２m、水深20cmほどの緩やかな泥底の流れに生息する。
**【分布】**本州、四国、九州。種子島。日本固有種。
**【県内の状況】**野田市、成田市、佐倉市、印西市、印旛郡、松戸市、市川市、茂原市、長生郡一宮町など県北部と中央部から記録されている。県北部では、佐倉市、印西市、成田市など数箇所で健在である。半島部の産地は極めて限定される。
**【保護対策】**三面護岸などにより生息地が壊滅することが多く、産地の護岸工事は、部分施工にするなど十分な配慮が必要である。
**【引用文献】**松井･松井(2001)／松木･斉藤(1996)／松木･加納(2002)／小野(2005)
**【写真】**P.168

（松木和雄）


キイロサナエ

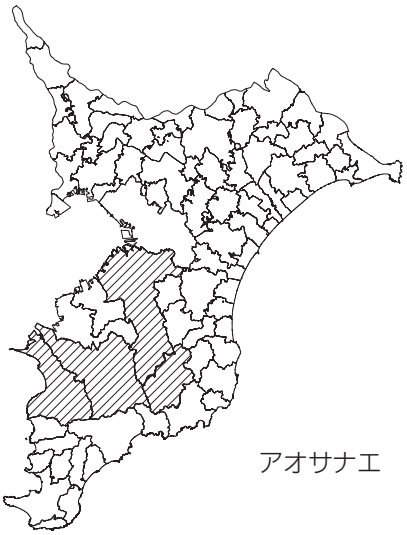
## B　アオサナエ　サナエトンボ科

国：掲載なし
千：B－B－B

*Nihonogomphus viridis* Oguma,1926

**【種の特性】**腹長37～ 43mm、後翅長29～ 37mm。胸部の大半が黄緑色の中型のサナエトンボで、♂の胸部は成熟すると鮮緑色になる。幼虫は、清流の砂礫底に生息し、他県では河川中流域や湖岸に見られるが、県内では、アサヒナカワトンボの幼虫が生息する上流域にも生息する。
**【分布】**本州、四国、九州。日本固有種。
**【県内の状況】**房総丘陵の市原市、夷隅郡大多喜町、富津市、君津市からのみ記録されている。
**【保護対策】**産地とその上流域での河川改修による環境変化や水質汚濁による生息地の消滅が心配される。産地の河川改修や用水路の護岸工事は、部分施工にするなど十分な配慮が必要である。
**【引用文献】**松木ほか(1993)
**【写真】**P.168

（松木和雄）


アオサナエ

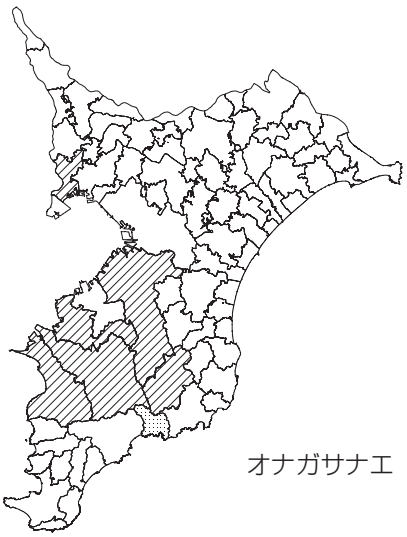
## B　オナガサナエ　サナエトンボ科

国：掲載なし
千：B－B－B

*Onychogomphus viridicostus* (Oguma,1926)

**【種の特性】**腹長39～ 46mm、後翅長32～ 36mm。中型のサナエトンボで、♂の尾部附属器は長く独特の形をしており、他種との区別は容易である。幼虫は、平地、丘陵地の河川中流の小石の多い川底に生息する。
**【分布】**本州、四国、九州および隠岐、種子島などの離島。日本固有種。
**【県内の状況】**千葉県では、江戸川周辺（市川市）および房総丘陵（市原市、君津市、木更津市、夷隅郡大多喜町、鴨川市）で記録されている。江戸川の記録はほとんど羽化殻で、上流からの流下個体が下流域で羽化したものと思われる。
**【保護対策】**房総丘陵の産地および産地上流域での河川改修による環境変化や水質汚濁による生息地の消滅が心配される。産地の河川改修や用水路の護岸工事には、部分施工など十分な配慮が必要である。
**【引用文献】**平澤(2003a)／中山･阿部(2001)／鈴木(2001b)
**【写真】**P.168

（松木和雄）


オナガサナエ

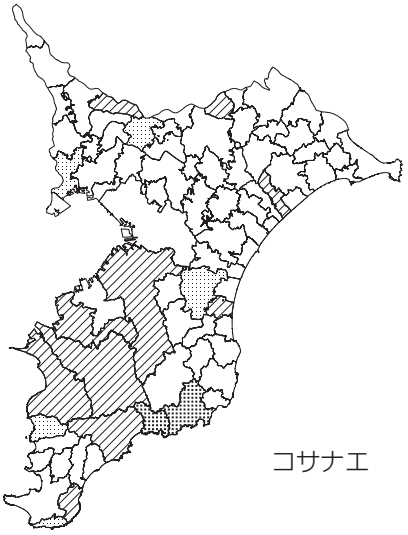
## B　コサナエ　サナエトンボ科

国：掲載なし
千：B－B－B

*Trigomphus melampus* (Selys,1869)

**【種の特性】**腹長26～ 32mm、後翅長22～ 28mm。翅胸の前面に7字形の黄条がある小型のサナエトンボで、同じ属のタベサナエやオグマサナエに良く似ているが、千葉県に生息するのは本種だけである(松木· 加納, 2009)。幼虫は、平地· 丘陵地· 山地のヨシやマコモの繁茂した池沼や湿地の滞水などに生息する。
**【分布】**北海道、本州(東北、関東、中部の各都県、日本海側の山口県までと滋賀県、三重県、奈良県、和歌山県の一部)。日本固有種。
**【県内の状況】**成田市、我孫子市、印西市、市川市、山武郡横芝光町、市原市、茂原市、長生郡長生村、君津市、木更津市、富津市、安房郡鋸南町、勝浦市、鴨川市、南房総市などから記録されているが、各地で消滅し、確実な産地はすでに数箇所しか残っていない。Bランク中で、Aランクへ移行する危険が最も大きい種である。
**【保護対策】**激減の理由は、池沼の埋立て、護岸工事による挺水植物の消失、農薬散布や池の栄養化などによるものと思われる。産地池沼を現状のまま保全することが望ましい。
**【引用文献】**松木· 加納(2002)／松木· 加納(2009) ／中山· 阿部(2001)
**【写真】**P.169

(松木和雄)


コサナエ

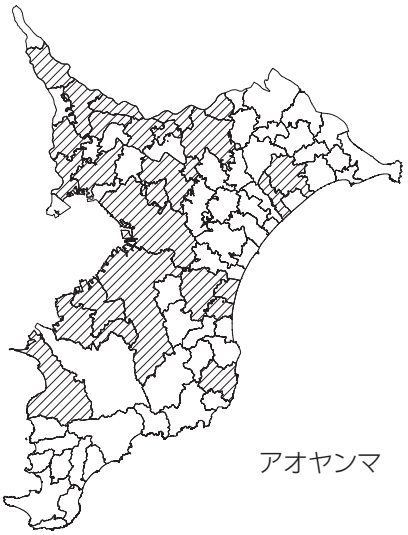
## B　アオヤンマ　ヤンマ科

国：掲載なし
千：B－B－B

*Aeschnophlebia longistigma* Selys,1883

**【種の特性】**腹長45～ 53mm、後翅長43～ 50mm。腹部第3節が全くくびれない大型のヤンマで、翅胸部前面と腹部背面以外は、全身が鮮やかな黄緑色をしていることで他のヤンマと容易に区別できる。幼虫は、ヨシ、マコモ、ガマなどの密生する池沼に生息する。国内では、広く分布するが産地はかなり限定される。成虫は、5月上旬～7月下旬に記録されている。マコモやヨシの他、ミクリへの産卵が報告されている(宮崎· 松木,1992)。成虫は、ヨシ、マコモ、スゲなど間を飛翔する。
**【分布】**北海道南西部、本州、四国、九州(熊本県以北) および淡路島、対馬などの離島、朝鮮半島、中国北部· 中部。
**【県内の状況】**本県では、野田市、柏市、我孫子市、印西市、印旛郡(酒々井町、本埜村)、佐倉市、成田市、市川市、船橋市、千葉市、山武郡横芝光町、匝瑳市、袖ヶ浦市、茂原市、長生郡(長生村、白子町)、いすみ市から記録されているが、安定した産地といえるのは、印旛沼他数箇所だけである。
**【保護対策】**産地は遷移して陸化してしまうところも多く、面積の広い池沼の保全が重要と思われる。
**【引用文献】**松井· 松井(2001) ／宮崎· 松木(1992)
**【写真】**P.169

(松木和雄)


アオヤンマ

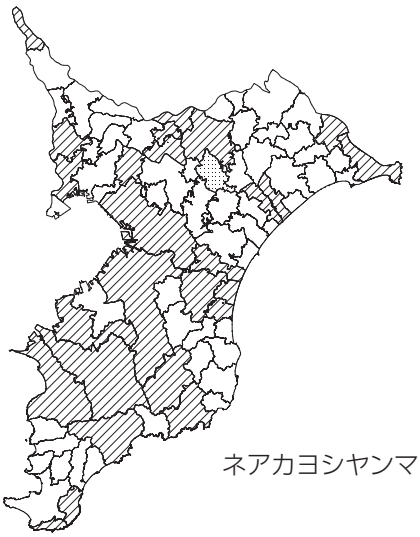
## B　ネアカヨシヤンマ　ヤンマ科

国：準絶滅危惧（NT）
千：B－B－B

*Aeschnophlebia anisoptera* Selys,1883

**【種の特性】**腹長54～ 63mm、後翅長46～ 53mm。アオヤンマと同じく腹部第3節が全くくびれない大型のヤンマであるが、翅胸部側面に2本の黒条があることで、アオヤンマとの区別は容易である。幼虫は、平地、丘陵地のヒメガマなどの茂る周囲に木立はあるが明るい湿地や水路状の水溜まり、スゲなどの茂る片側が開けており樹陰のある湿地、落葉が積もり、水草の見当たらない林中の暗い小池などに生育する(西田,1999)。全国的には産地は極めて限定される。環境省レッドデータブック2007年版で準絶滅危惧種に指定されている。
**【分布】**本州(新潟県以南)、四国、九州(宮崎県以北) および伊豆大島、淡路島、天草諸島などの離島、中国中部。
**【県内の状況】**県内のほぼ全域から記録されている。朝比奈(1982a) では、千葉県の本種を『近年当該地域に於いて絶滅したと考えられる種(E)』に含め、「千葉県では一ケ所を除いて絶滅」とされていたが、最近の調査では、県内数箇所で少数個体が得られている(西田,1999: 嶋本,2009: 互井,2009cなど)。
**【保護対策】**幼虫は水深の浅いところを好むため、産地は数年で遷移して陸化してしまうところも多く、周辺林を伴う浸出水の途切れない水溜まりなどの保全が重要と思われる。
**【引用文献】**朝比奈(1982) ／西田(1999) ／嶋本(2009) ／互井(2009c)
**【写真】**P.169

(松木和雄)


ネアカヨシヤンマ

## B　カトリヤンマ　ヤンマ科

国：掲載なし
千：B－B－B

*Gynacantha japonica* Bartenef, 1909

**【種の特性】**腹長54～ 60mm、後翅長43～ 50mm。腹部が細長い中型のヤンマで、胸部は無斑。胸部は成熟すると緑色になる。♂の尾部上附属器は細く長いことで他のヤンマとの区別は容易である。幼虫は、平地、丘陵地の樹陰の多い池や周辺林のある水田、緩やかな流れに生育する。近年関東地方では産地が激減している県が多い。羽化した成虫は、羽化場所脇のやや薄暗い林内の比較的低い位置に多数静止している。産卵は9月下旬から10月下旬にかけて行われる。

**【分布】**北海道南部、本州、四国、九州および飛島、佐渡島、三宅島、淡路島、家島諸島、隠岐、壱岐、対馬、天草諸島、南西諸島などの離島、朝鮮半島、台湾、中国北部・中部。

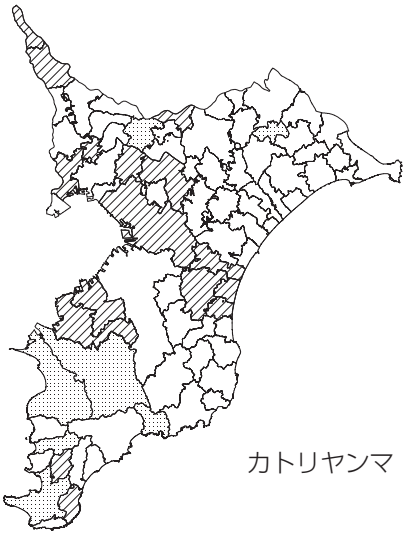
**【県内の状況】**全域から記録されているが近年減少が著しい。

**【保護対策】**産地の樹陰の多い池や周辺林のある水田の保全が必要と思われる。

**【引用文献】**阿部(2000)／中山・阿部(2001)／中山(2010)／西田(1992)／互井(2002b)

**【写真】**P.169

（松木和雄）



カトリヤンマ

## B　タカネトンボ　エゾトンボ科

国：掲載なし
千：B－B－B

*Somatochlora uchidai* Förster,1909

**【種の特性】**腹長40～ 47mm、後翅長36～ 44mm。同じ属のエゾトンボやハネビロエゾトンボに似るが、♂の尾部附属器の形や翅胸部側面に黄条がないことで区別できる。幼虫は、丘陵地・低山地～山地の樹陰の多い池や寺社の人工池、コンクリート製の貯水槽などに生息する。西田(1992)は、梅ケ瀬(標高230 m程度)で林縁の2×4mほどの防火水槽と1㎡ほどの水溜まりで産卵を確認している。

**【分布】**北海道、本州、四国、九州および国後島、利尻島、奥尻島、佐渡島、伊豆諸島、隠岐、対馬、天草諸島、屋久島などの離島、ロシア。

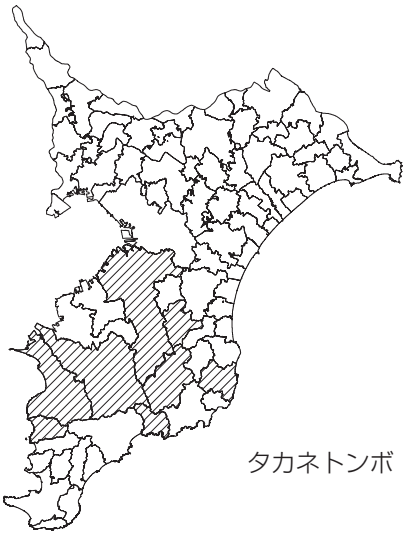
**【県内の状況】**産地は房総丘陵に集中しており、市原市、君津市、富津市、長生郡長南町、いすみ市、夷隅郡大多喜町、鴨川市、安房郡鋸南町からのみ記録されている。

**【保護対策】**産地の樹陰の多い池や寺社の人工池などの周辺林と合わせての保全が必要である。

**【引用文献】**平澤(2003b)／西田(1992)／鈴木(2001b)

**【写真】**P.169

（松木和雄）



タカネトンボ

## B　ハラビロトンボ　トンボ科

国：掲載なし
千：C－B－B

*Lyriothemis pachygastra* (Selys,1878)

**【種の特性】**腹長20～ 25mm、後翅長23～ 29mm。腹部が極めて幅広く短いことで区別は容易である。♂は成熟すると黒化し、腹部第2～6節が白粉で覆われる。平地、丘陵地の湿地、水田、緩流などに生息する。摂食期の成虫は、林間の道の脇や林縁の高さ1m前後の枝先に静止する。春の出現初期には丘陵地の日当たりの良い道端や崖、枯れ草あるいは木の幹の上などに止まり、出現末期になると葉の上などにも止まるようになる(宮崎・松木,1992)。

**【分布】**北海道南西部、本州、四国、九州および佐渡島、淡路島、対馬、五島列島、天草諸島、種子島などの離島、朝鮮半島、中国沿海部・東北部。

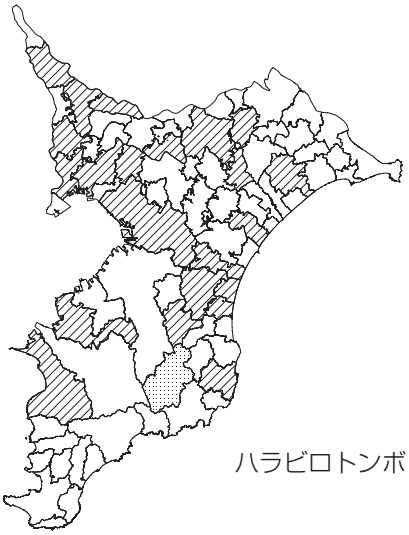
**【県内の状況】**野田市、我孫子市、柏市、印旛郡印旛村、成田市、香取郡、松戸市、市川市、八千代市、千葉市、山武市、山武郡(芝山町、大網白里町)、匝瑳市、茂原市、長生郡(長生村、白子町)、いすみ市、夷隅郡大多喜町、木更津市、富津市などから記録されているが残存産地は多くない。

**【保護対策】**幼虫は、水深の極めて浅い湿地を好む。そのため、産地は数年で遷移して陸化してしまうところも多く、安定した産地はほとんどない。現存産地の湿地の保全が望ましい。

**【引用文献】**松井・松井(2001)／宮崎・松木(1992)／中山・阿部(2001)／中山(2003)／佐藤(2004)／鈴木(2001b)／互井(2002b)／互井(2010d)

**【写真】**P.169

（松木和雄）



ハラビロトンボ

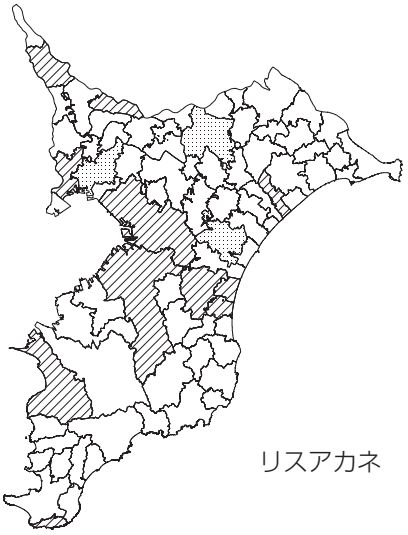
## B　リスアカネ　トンボ科

国：掲載なし
千：C－B－B

*Sympetrum risi risi* Bartenef,1914

**【種の特性】**腹長24～ 30mm、後翅長27～ 34mm。翅端に明瞭な黒褐色斑があり、ノシメトンボ、コノシメトンボに似るが翅胸部側面の黒条の形で区別できる。幼虫は、平地･丘陵地の林に囲まれた日陰のある池や水田の林縁の水溜に生息する。
**【分布】**本州、四国、九州および飛島、淡路島、隠岐、見島、壱岐、対馬、五島列島、天草諸島、甑島諸島などの離島、朝鮮半島、中国中部～東北部、アムール。北海道には、別亜種ヒメリスアカネ*S. risi yosico* Asahinaを産する。
**【県内の状況】**野田市、我孫子市、成田市、市川市、船橋市、千葉市、山武郡横芝光町、東金市、茂原市、長生郡（長生村、白子町）、富津市、南房総市などから記録されているが、確実な産地は少ない。
**【保護対策】**現存産地の日陰の林を伴う池沼の保全が必要である。
**【引用文献】**中山(2010)
**【写真】**P.169

（松木和雄）


リスアカネ

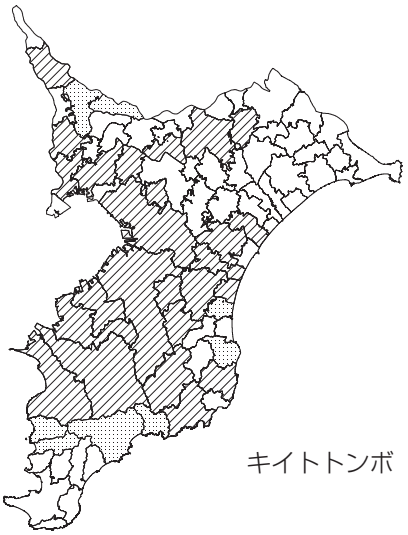
## C　キイトトンボ　イトトンボ科

国：掲載なし
千：D－C－C

*Ceriagrion melanurum* Selys,1876

**【種の特性】**腹長23～ 35mm、後翅長15～ 23mm。胸部･腹部が黄色いイトトンボで区別は容易である。成虫は、5月下旬～9月上旬に記録されている。和歌山県の事例では6月と9月に羽化のピークがあり、年2化と考えられている（浜田･井上,1985)が、千葉県での詳細は不明である。幼虫は、平地･丘陵地の挺水植物の多い明るい池沼や湿地、廃田に生息している（宮崎･松木，1992)。
**【分布】**本州、四国、九州および佐渡島、淡路島、隠岐、見島、壱岐、対馬、五島列島、天草諸島、甑島列島、種子島、屋久島、口永良部島などの離島、朝鮮半島、台湾、中国中部･北部。
**【県内の状況】**本県ではほぼ全域から記録されているが、近年減少が著しい。
**【保護対策】**現存産地の池沼や湿地を周囲の草原とともにそのまま保全することが望ましい。
**【引用文献】**松井･松井(2001)／宮崎･松木(1992)／中山･阿部(2001)／佐藤(2004)／互井(2002b)
**【写真】**P.169

（松木和雄）


キイトトンボ

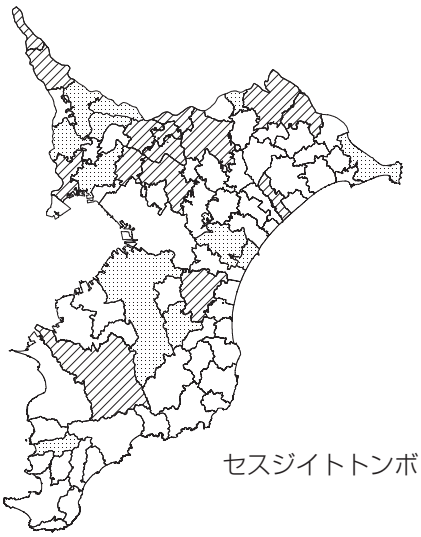
## C　セスジイトトンボ　イトトンボ科

国：掲載なし
千：D－D－C

*Paracercion hieroglyphicum* (Brauer,1865)

**【種の特性】**腹長21～ 29mm、後翅長13～ 22mm。ムスジイトトンボ、オオイトトンボに良く似ているが、頭部や胸部の斑紋、尾部附属器の形などで区別できる。奈良岡(1976）は、佐倉市印旛沼の個体群などで本種成虫が春発生のものから7～8月発生のものまで連続して小型化する傾向があることを報告している。成虫は、4月下旬～ 10月上旬に記録されている。平地･丘陵地の日当りの良い植生の豊かな池沼や河川のワンドなどに生息する。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州および佐渡島、見島、五島列島、天草諸島、甑島列島などの離島、朝鮮半島、中国中部･北部、香港。
**【県内の状況】**本県では全域から記録されているが、近年減少が著しく、Cランク中で、Bランクへ移行する危険が最も大きい種である。現存産地は県北部が多い。
**【保護対策】**現存産地の池沼を周囲の草原とともにそのまま保全することが望ましい。
**【引用文献】**松井･松井(2001)／奈良岡(1976)
**【写真】**P.169

（松木和雄）


セスジイトトンボ

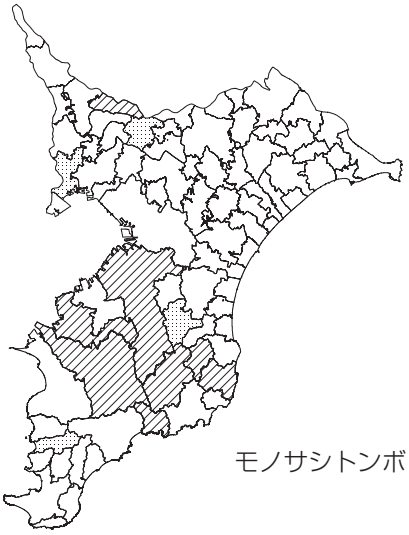
## C　モノサシトンボ　モノサシトンボ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Copera annulata* (Selys,1863)

**【種の特性】**腹長31～ 39mm、後翅長19～ 25mm。腹部に物差しの目盛りのような淡色の斑紋がある大型のイトトンボでオオモノサシトンボに良く似ている。幼虫は、平地、丘陵地の樹陰の多い水草の茂った池沼に生息する。海岸部のラグーンでも確認されている（小口，1990）。本県では、同属のオオモノサシトンボと棲み分けていると思われる。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州および粟島、佐渡島、壱岐、対馬、天草諸島などの離島、朝鮮半島、中国西部･中部。
**【県内の状況】**我孫子市、印西市、市川市、市原市、長生郡長南町、君津市、木更津市、いすみ市、夷隅郡大多喜町、鴨川市、南房総市から記録されているが、確実な産地は少なく、いすみ市周辺以外では多くない。
**【保護対策】**産地である平地、丘陵地の樹陰の多い水草の茂った池沼のそのままの保全が望ましい。
**【引用文献】**中山･阿部(2001)／小口(1990）／鈴木(2001b)
**【写真】**P.169

（松木和雄）


モノサシトンボ

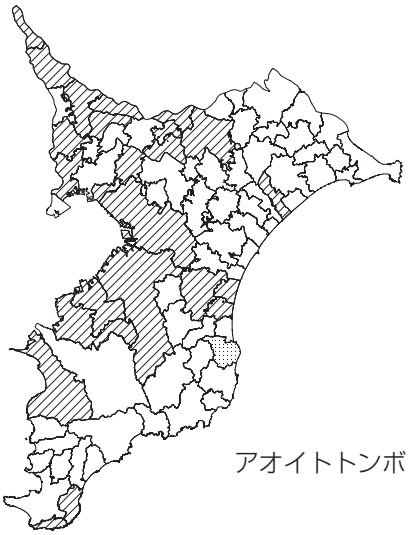
## C　アオイトトンボ　アオイトトンボ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Lestes sponsa* (Hansemann,1823)

**【種の特性】**腹長26～ 34mm、後翅長19～ 25mm。同属のオオアオイトトンボ、コバネアオイトトンボに似ているが、翅胸側面の金緑色部の形や尾部附属器の形で区別できる。成虫出現期間は、5月下旬～ 11月上旬。幼虫は、平地、丘陵地の挺水植物の多い明るい池沼に生息する。宮崎･松木（1992）は、本種が7月初めには体表面に白粉を生ずること、林縁の下草上で越夏することなどを報告している。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州および国後島、奥尻島、佐渡島、壱岐、対馬、甑島列島などの離島、朝鮮半島、中国東北部、アフリカ北部からヨーロッパ～シベリア。
**【県内の状況】**全域から記録されているが、産地はオオアオイトトンボに比べるとかなり限定される。
**【保護対策】**産地の挺水植物の多い明るい池沼と周辺林の保全が望ましい。
**【引用文献】**松井･松井(2001）／宮崎･松木(1992）／互井(2002b）／互井(2010a)
**【写真】**P.169

（松木和雄）


アオイトトンボ

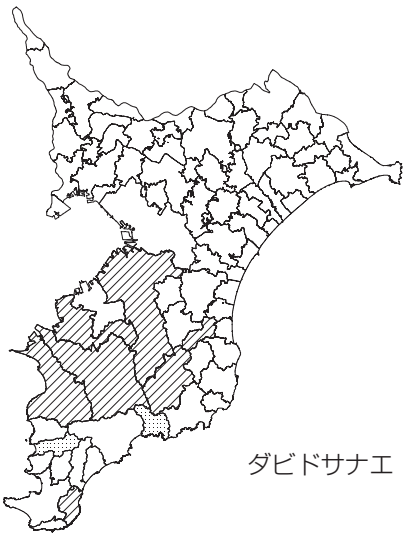
## C　ダビドサナエ　サナエトンボ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Davidius nanus* (Selys,1869)

**【種の特性】**腹長31～ 36mm、後翅長27～ 33mm。コサナエ属に似たサナエトンボであるが、翅胸部前面にハの字形の黄条と1対の黄点があることや尾部附属器の形などで区別できる。対馬のものは小型であることが知られている。成虫は、4月下旬～6月中旬に記録されている。平地、丘陵地、山地の渓流の砂底～砂泥底に生息する。
**【分布】**本州、四国、九州と隠岐、対馬などの離島。日本固有種。
**【県内の状況】**本県では、房総丘陵（市原市、君津市、木更津市、富津市、長生郡睦沢町、夷隅郡大多喜町、鴨川市、南房総市などから記録）に分布しているが個体数はいずれでも多くない。
**【保護対策】**産地である山間渓流の護岸工事などの際は、部分施工にするなど本種幼虫への十分な配慮が必要である。
**【引用文献】**中山･阿部(2001)
**【写真】**P.169

（松木和雄）


ダビドサナエ

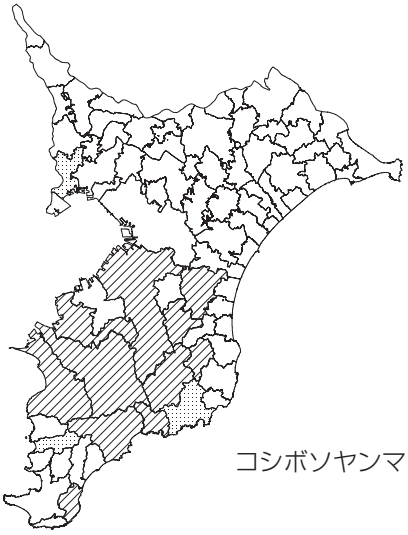
## C　コシボソヤンマ　ヤンマ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Boyeria maclachlani* (Selys,1883)

**【種の特性】**腹長52～ 65mm、後翅長49～ 60mm。濃い褐色の地に黄色斑のある大型のヤンマ。♂では特に顕著。腹部第3節が強くくびれるのが特徴。幼虫は、平地、丘陵地の木陰の多い緩やかな清流に生息する。川幅は生息環境により50cm～ 10mとかなりの幅がみられる。
**【分布】**北海道南西部、本州、四国、九州および粟島、佐渡島、隠岐、壱岐、対馬、五島列島、天草諸島、種子島、屋久島などの離島。日本固有種。
**【県内の状況】**市川市、茂原市、市原市、君津市、木更津市、富津市、夷隅郡大多喜町、長生郡長南町、勝浦市、鴨川市、南房総市などから記録されている。現存する産地は、房総丘陵が中心である。
**【保護対策】**産地河川の護岸工事は、部分施工にするなど十分な配慮が必要である。
**【引用文献】**平澤(2003b) ／加納(2002) ／加納· 木村(2007) ／中山· 阿部(2001)
**【写真】**P.170

（松木和雄）


コシボソヤンマ

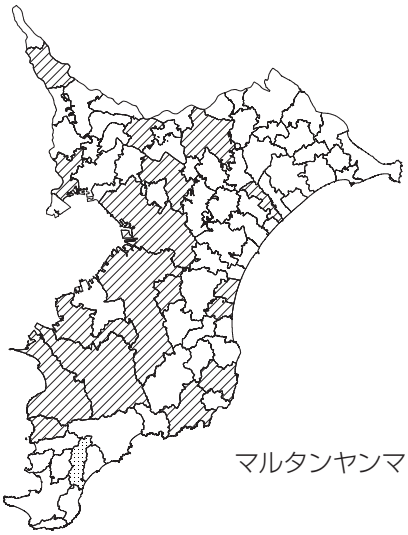
## C　マルタンヤンマ　ヤンマ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Anaciaeschna martini* (Selys,1897)

**【種の特性】**腹長48～ 60mm、後翅長41～ 50mm。胸部、腹部は赤褐色の地に黄色の斑紋を持つ。成熟すると♂は、黄斑が鮮青色になる。幼虫は、平地、丘陵地の挺水植物の多い古い池沼や湿地に生息する。本種やネアカヨシヤンマの幼虫では、継続発生が望めない産地も多く、近隣の同様な条件の場所を移動しながら生息しているものと思われる。
**【分布】**本州(関東地方以南)、四国、九州および佐渡島、淡路島、隠岐、角島、対馬、五島列島、天草諸島、下甑島、種子島、屋久島などの離島、台湾、インド。
**【県内の状況】**野田市、印西市、佐倉市、成田市、市川市、千葉市、山武郡横芝光町、市原市、長生郡(白子町、長柄町、長生村)、君津市、木更津市、富津市、いすみ市、勝浦市、安房郡鋸南町、南房総市から記録されているが、産地はかなり限定されている。
**【保護対策】**産地の挺水植物の多い古い池沼や湿地を周辺林とともに保全することが望ましい。
**【引用文献】**中山· 阿部(2001)／中山(2010c)／志賀(2005) ／互井(2010c)
**【写真】**P.170

（松木和雄）


マルタンヤンマ

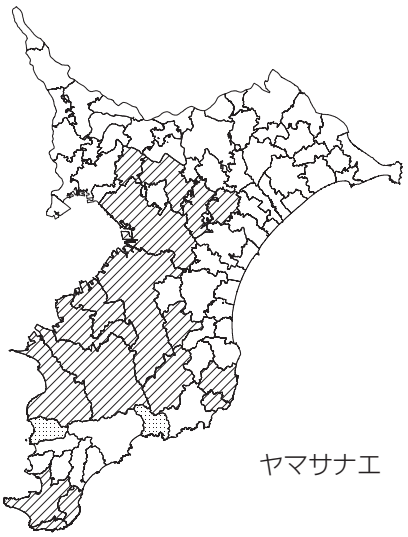
## D　ヤマサナエ　サナエトンボ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Asiagomphus melaenops* (Selys,1854)

**【種の特性】**腹長44～ 48mm、後翅長37～ 42mm。大型のサナエトンボで同属のキイロサナエに良く似ているが、胸部· 腹部の斑紋の違いや♂の副性器、♀の生殖弁の形で区別できる。成虫は、主に4月下旬～6月下旬に記録されている。幼虫は、平地、丘陵地を流れる河川上流～中流の川岸に近い砂泥底に生息する。
**【分布】**本州、四国、九州および隠岐、対馬、天草諸島、甑島列島などの離島。日本固有種。
**【県内の状況】**八街市、佐倉市、八千代市、千葉市、山武市、市原市、木更津市、袖ヶ浦市、君津市、長生郡長南町、いすみ市、夷隅郡大多喜町、富津市、安房郡鋸南町、鴨川市、南房総市、館山市から記録されている。近年減少が著しい。房総半島南部に現存産地が多い。
**【保護対策】**川岸に近い砂泥底に生息するので、河川上流～中流の護岸工事などの際は、部分施工をするなど本種への十分な配慮が望ましい。
**【引用文献】**中山· 阿部(2001) ／互井(2010b)
**【写真】**P.170

（松木和雄）


ヤマサナエ

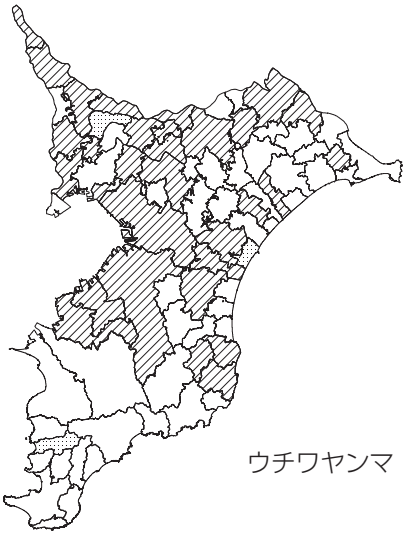
## D　ウチワヤンマ　サナエトンボ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Sinictinogomphus clavatus* (Fabricius,1775)

**【種の特性】**腹長52～ 60mm、後翅長41～ 51mm。腹部第8節の側縁が大きく広がってうちわ状になっている大型のサナエトンボ。成虫は、5月下旬～9月に記録されている。幼虫は、平地、丘陵地の池、湖に生息する。
**【分布】**本州、四国、九州および粟島、佐渡島、淡路島、壱岐、平戸島、五島列島、天草諸島などの離島、朝鮮半島、台湾、中国北部･中部、台湾、トンキン。
**【県内の状況】**ほぼ全域から記録されているが、近年減少が著しい。銚子市や県南部の鴨川市、館山市からは未記録。
**【保護対策】**産地の池、湖とその周辺の草原の保全が望ましい。
**【引用文献】**互井(2010e)
**【写真】**P.170

（松木和雄）


ウチワヤンマ

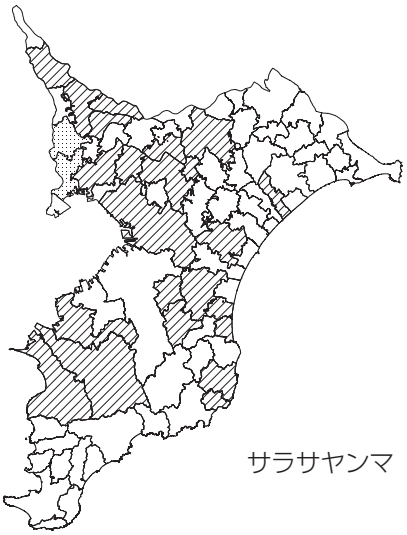
## D　サラサヤンマ　ヤンマ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Sarasaeschna pryeri* (Martin,1909)

**【種の特性】**腹長41～47mm、後翅長36～41mm。腹部の黄斑が小さい小型のヤンマ。幼虫は、低山地、丘陵地の湿地に生息するが、詳しい生活史が不明な種である。成虫もハンノキなどの多い湿地の林の中の僅かに開けた空間を旋回飛翔する。県内では、休耕田の増加に伴い、一時的に記録される箇所が多いが休耕田の乾燥化とともに消滅し、安定した産地は少ない。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州および隠岐、対馬、天草諸島、種子島、屋久島などの離島。日本固有種。
**【県内の状況】**ほぼ全域から記録されているが、産地はかなり限定される。
**【保護対策】**現存産地の中でも林を伴う水源のある湿地や規模の大きい湿地を伴う池沼を保全することが必要と思われる。
**【引用文献】**松木ほか(1993)
**【写真】**P.170

（松木和雄）


サラサヤンマ

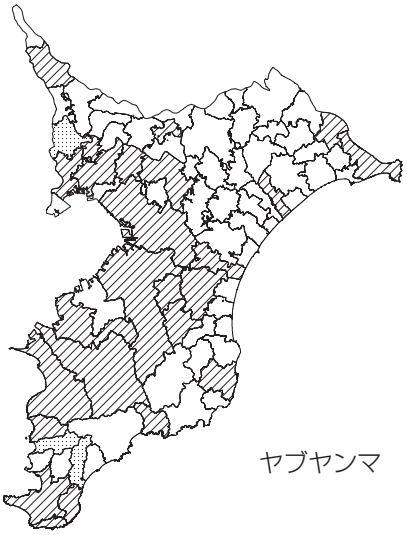
## D　ヤブヤンマ　ヤンマ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Polycanthagyna melanictera* (Selys,1883)

**【種の特性】**腹長60～ 67mm、後翅長49～ 57mm。大型のヤンマで、縁紋は後翅より前翅のほうが大きい。黄色の地に褐色の条斑があるが、成熟すると黄色部が黄緑色になる。成虫は、6月中旬～9月下旬に記録されている。藍野(1937) は、本県における成虫の出現最盛期を7, 8月としている。また、外房では、幼虫の発生は年1回で第1齢幼虫の出現期は、8月上旬から9月下旬と述べている。幼虫は、丘陵地、低山地の樹陰の多い小規模な水溜や小さな池沼、植物性沈積物の多い寺社の人工池やコンクリート製の貯水槽に生息する。
**【分布】**本州、四国、九州および佐渡島、伊豆諸島、淡路島、家島諸島、壱岐、対馬、五島列島、天草諸島、種子島、トカラ列島、奄美大島、沖縄本島などの離島、朝鮮半島、台湾、中国中部。
**【県内の状況】**ほぼ全域から記録されているが、近年減少が著しく多産地はない。
**【保護対策】**現存産地の池沼と周辺林をセットで保全することが望ましい。
**【引用文献】**藍野(1937)
**【写真】**P.170

（松木和雄）


ヤブヤンマ

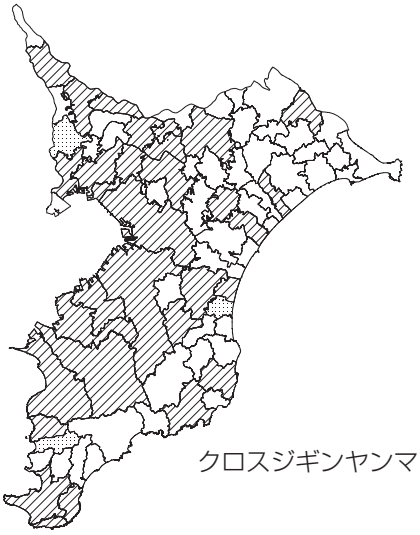
## D　クロスジギンヤンマ　ヤンマ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Anax nigrofasciatus nigrofasciatus* Oguma,1915

**【種の特性】**腹長52～ 59mm、後翅長44～ 49mm。ギンヤンマに似るが、胸部側面に2本の黒条があることなどで区別できる。成虫は、4月下旬～7月下旬に記録されている。幼虫は平地、丘陵地の木陰のある池沼や人工的な貯水槽(宮崎・松木，1992）に生息する。
**【分布】**北海道南西部、本州、四国、九州および佐渡島、淡路島、壱岐、対馬、天草諸島、種子島、奄美大島などの離島、中国、朝鮮半島、台湾、フィリッピン。
**【県内の状況】**全域から記録されているが、近年減少が著しくいずれの記録地でも個体数も多くない。
**【保護対策】**現存産地の池沼と周辺林をセットで保全することが望ましい。
**【引用文献】**宮崎・松木(1992)
**【写真】**P.170

（松木和雄）


クロスジギンヤンマ

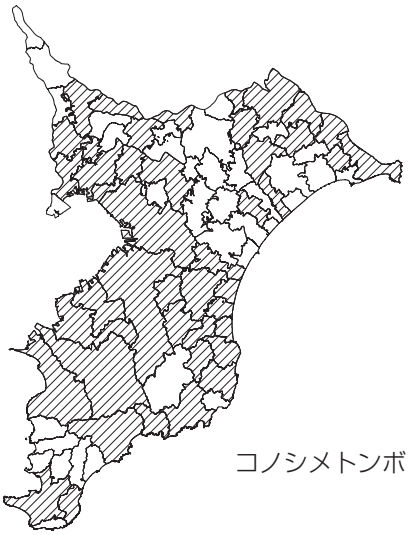
## D　コノシメトンボ　トンボ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Sympetrum baccha matutinum* Ris,1911

**【種の特性】**腹長25～ 30mm、後翅長29～ 35mm。翅端に黒斑のあるアカネで、胸部側面の斑紋の形で同属のリスアカネやノシメトンボと区別できる。成虫は、6月下旬～ 12月中旬に記録されている。幼虫は、平地・丘陵地の挺水植物の繁茂する池沼や水田脇の水溜から得られるが、小学校プールや市民プールなどからの発生記録もある（松木・互井,2004：互井,2004b)。ノシメトンボとの混棲地では、越夏個体は、同じ林縁の薄暗い場所でもノシメトンボよりやや入りこんだ場所で越夏する傾向がみられる(宮崎・斉藤，1991)。千葉県産の幼虫の形態は、市販の図鑑の特徴と合致しない個体が多く、同定に注意が必要である(松木・互井,2004)。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州および奥尻島、飛島、粟島、佐渡島、淡路島、隠岐、壱岐、対馬、五島列島、天草諸島、種子島などの離島、朝鮮半島、中国東北部。
**【県内の状況】**全域から記録されているが、いずれの記録地でも個体数は多くない。
**【保護対策】**現存産地の池沼と周辺林をセットで保全することが望ましい。
**【引用文献】**松木・互井(2004)／宮崎・斉藤(1991)／互井(2004b)
**【写真】**P.170

（松木和雄）


コノシメトンボ

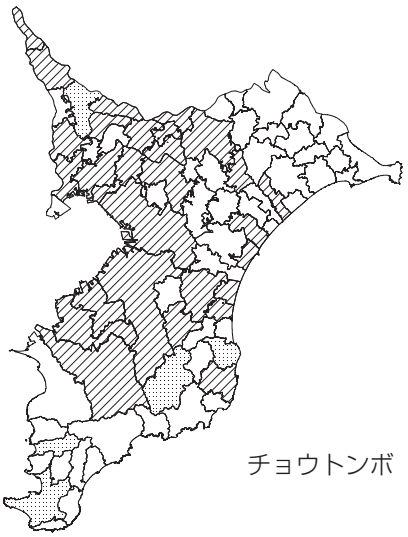
## D　チョウトンボ　トンボ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Rhyothemis fuliginosa* Selys,1883

**【種の特性】**腹長21～ 26mm、後翅長33～ 38mm。黒色の胸部、腹部と角度により紫藍色にかがやく黒い翅を持つ特異なトンボ。幼虫は、平地、丘陵地の植生豊かな池沼に生息する。産地は、南西日本に多いが、近年環境破壊で激減している。
**【分布】**北海道の一部、本州、四国、九州および淡路島、隠岐、壱岐、五島列島、天草諸島、種子島などの離島、朝鮮半島、中国中部・北部。
**【県内の状況】**全域から記録されているが、印旛沼周辺の池沼やいすみ市以外では個体数は少ない。
**【保護対策】**現存産地の古い池沼の水中、周辺の植生を含めたそのままの保全が望ましい。
**【引用文献】**松木ほか(1993)
**【写真】**P.170

（松木和雄）


チョウトンボ

# カワゲラ目

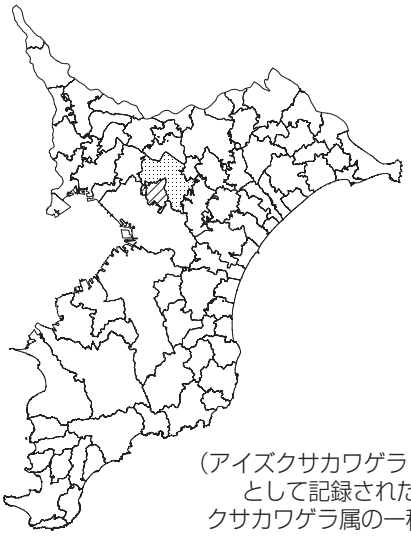
## A （アイズクサカワゲラとして記録された）クサカワゲラ属の一種　アミメカワゲラ科

国：掲載なし
千：B（*Isoperla aizuana*）－A（*Isoperla suzukii*）－A

*Isoperla* spec. recorded as *I. aizuana* Kohno, 1953

**【種の特性】**前翅長約9-12mm。アイズクサカワゲラ*I. aizuana*やスズキクサカワゲラ*I. suzukii*に良く似ている。正確な同定にはオスの交尾器を観察する必要があるが、両種はそれぞれに大型河川の渓流域と中流域に生息すると見られ、千葉県で記録されたような、小規模の緩やかな小川の瀬に見られる本種は未記載のものと考えられる。
**【分布】**全国的な分布域については不明。
**【県内の状況】**下総地域の小規模河川からアイズクサカワゲラとして記録されている。2000年に「千葉県の保護上重要な野生生物」が発行された際は、過去の記録にもとづいてアイズクサカワゲラ（アイズミドリカワゲラモドキ）*Isoperla aizuana* Kohno, 1953の記録のままBランクとして掲載したが、その後、東京農業大学の石塚氏による修士論文の研究（2002）により、平地に生息する可能性のある種として*Isoperla suzukii* Okamoto 1912が再記載され2006年の見直しの際に掲載種名を入れ替えた。しかし、千葉県立中央博物館に所蔵されていた千葉市内で採集された標本を改めて詳しく検鏡したところ、いずれの種とも異なる特徴を示していた。県内からの記録は全てアイズクサカワゲラの名前で記録されており、1900年代後半に下総台地の鹿島川水系において僅かな記録があるのみで、最近の記録は皆無である。したがって、すでにX（消息不明・絶滅生物）となっている可能性もあるが、詳細な調査がされていないためAランクにとどめた。
**【保護対策】**下総地域から確認されるクサカワゲラ属は全て本種と判断してもよい。生息が確認された場合には水質保全などの面からも速やかに生息河川の流域にわたる保全対策が望まれる。
**【引用文献】**佐倉市水系生物研究グループ（1980）／千葉県水質保全研究所（1984）／石塚（2002）
**【写真】**P.170

（清水高男）



（アイズクサカワゲラとして記録された）クサカワゲラ属の一種

## D クロヒゲカワゲラ　カワゲラ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Kamimuria quadrata* (Klapálek, 1907)

**【種の特性】**前翅長約15-26mm。幼虫は同属のなかでも黒褐色域が広く、頭胸部の斑紋が不明瞭である。成虫は秋に見られ黄褐色であるが、触角は黒くなる。
**【分布】**本州・四国・九州
**【県内の状況】**清澄山系の二間川源流域での採集記録をのぞき、県内からの記録はない。県内の生息基盤は極めて脆弱であると考えられる。
**【保護対策】**人里離れた同種の生息域は環境改変の影響は受けにくいと思われるが、生息が確認された場合には、県内では希少な渓流と見なされる事から現状のまま保全する事が望まれる。
**【引用文献】**松丸（1979）／内田（1986）
**【写真】**P.170

（清水高男）

クロヒゲカワゲラ

# ゴキブリ目

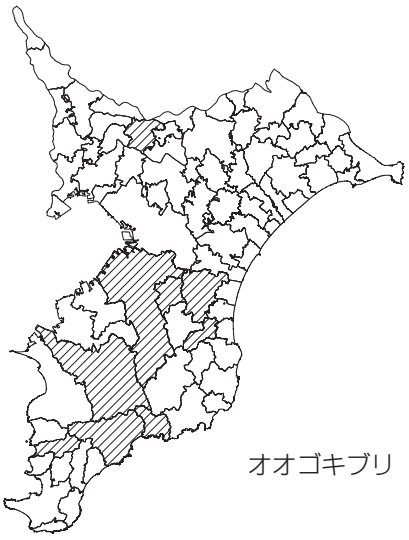
## D　オオゴキブリ　オオゴキブリ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Panesthia angustipennis spadica* (Shiraki, 1906)

**【種の特性】**体長37-41mm。日本最大のゴキブリ。朽木中で生活をしそれを食べる。卵胎生、同じ朽木内に成虫と幼虫が同居することがあるが、子虫の保護はしない。ほかのゴキブリ類に比べ体は堅い。雌の翅は小さいので飛翔できず、歩行のみの移動である。雄の新成虫は灯火に飛来するが、成熟した個体は翅が擦り切れて飛べない。
**【分布】**本州、四国、九州。
**【県内の状況】**印西市木下、長柄町、茂原市、睦沢町、市原市、君津市、富山町、清澄山、元清澄山、その生態から森林の豊かな地域に生息している。稀に河川に漂着した大木の朽木中で集団生活をしていることがある。
**【保護対策】**森林の保全
**【文献】**富永（1992）／山﨑（1999）
**【写真】**P.171

（山﨑秀雄）



オオゴキブリ

# カマキリ目

## C　ヒメカマキリ　ヒメカマキリ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Acromantis japonica* Westwood, 1889

**【種の特性】**体長雄25-33mm、雌25-36mm。カマキリとしては小型で緑色または褐色。頭は大きく、幅は長さの2倍。成虫は夏から秋に出現するが、南西諸島では5-7月、9-11月に確認されている。樹上にすみ、雄はよく飛ぶ。

**【分布】**本州（太平洋側は千葉県以南、日本海側は山形県以南）、四国、九州、佐渡島、粟島、淡路島、対馬、南西諸島。

**【県内の状況】**習志野市御料牧場、君津市尾崎、鴨川市、清澄山から記録があるが、習志野市の産地であった御料牧場は、現在都市化されており生息の可能性は低い。鴨川市ではクスノキの幹に産付された卵のう（卵鞘）が見つかっており（倉西 2010）、土着していることを伺わせる。

**【保護対策】**常緑広葉樹を中心とした雑木林を保全することが望ましい。

**【引用文献】**倉西良一（2010）

（井上尚武）

ヒメカマキリ

## D　ヒナカマキリ　カマキリ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Amantis nawai* (Shiraki, 1911)

**【種の特性】**体長雄12-14mm、雌13-16mm。翅は小さく鱗片状で、飛べない。褐色型のみ知られ、淡い灰黄褐色から灰褐色。年一化で、成虫は夏から秋に出現。主に常緑広葉樹林の中の落ち葉や、潅木の葉の上にすむが、松林やアズマネザサなどの竹林などにも見られる。林の縁から遠く離れることはない。

**【分布】**本州～琉球、佐渡島、対馬。台湾。

**【県内の状況】**市原市潤井戸、同市高滝、袖ヶ浦市坂戸市場、君津市尾崎、木更津市桜井、富津市小山野付近、富山町、千倉町連台枝、同町高塚山、富浦町青木山（山崎 1997）、勝浦市大沢、鴨川市江見（千葉県環境部自然保護課 2000）から記録がある。山崎（1997）によると生息地にはイヌビワやカクレミノが生育し、本種の分布にはこのような植生との関連性があるという。

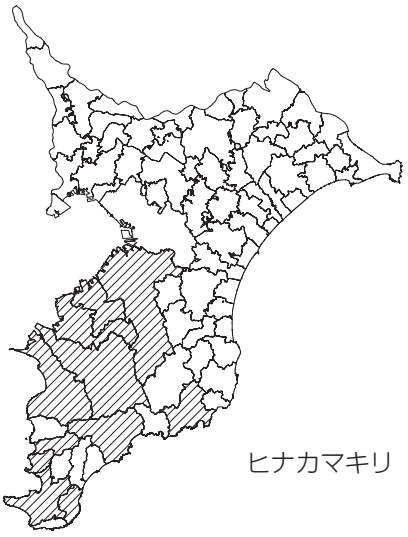
なお本来の分布地から飛び離れた県北部からも記録があるが詳細は不明で、今後の再調査が必要である。

**【保護対策】**常緑広葉樹林や竹林を保全することが望ましい。

**【引用文献】**山崎秀雄（1997）

**【写真】**P.171

（井上尚武）



ヒナカマキリ

# バッタ目

## X　アカハネバッタ　バッタ科

国：掲載なし
千：無－X－X

*Celes akitanus* (Shiraki,1910)

**【種の特性】**体長（翅端まで）雄25～27mm, 雌35～40mm。後翅が赤いのが本種の特徴で和名のもとになった。現在国内から確実な生息地が見つかっておらず1986年以降の採集記録がない。過去の標本が大学や一部の博物館に保管されており、かつては普通に生息する所もあったようである。採草地の減少や燃料革命による里山の管理放棄などが絶滅の原因ではないかと考えられる。
**【分布】**本州。東シベリア、中国東北部、内モンゴル、朝鮮半島北部。
**【県内の状況】**採集者の坂井治雄氏によると、千葉県で唯一の記録地であった船橋市田喜野井は墓地の中の草地で、1950年7月に1頭採集されたということである（坂井1951）。この記録以外では前年に1頭目撃したのみで、その後見かけることがなかったという。この貴重な標本は残念ながら現在虫害のために失われている。
**【引用文献】**坂井治雄（1951）
**【写真】**P.171

（井上尚武）

アカハネバッタ

## A　オオクサキリ　キリギリス科

国：掲載なし
千：A－A－A

*Ruspolia dubia* (Redtenbacher, 1891)

**【種の特性】**年1化の大型のクサキリの仲間である。クサキリに似ているが、前胸背の上縁に黄色の筋があり、成虫は7月下旬頃から夜間丈の高い草の上で、チャキチャキチャキという金属的な大きい声で鳴く点で区別できる。鳴き声に3つの型がある。
　なお学名については異論があるが、ここでは便宜上以前使用されたものを記した。
**【分布】**本州（新潟、茨城、栃木、群馬、埼玉、東京、千葉、）、九州（福岡、長崎、大分）。
**【県内の状況】**県内からは利根川堤防の栄町、成田市、印西町（井上1983）、銚子市（井上　2005）、大網白里町（松谷 1997）などから記録がある。堤防では個体数は少ない。大網白里町では水田地帯のイネの上に止まって、夜間鳴いている。ヨシ原などに生息していた個体が水田に改変された後、かろうじて生存できたと考えられる。
**【保護対策】**河川の堤防などは絶滅につながるような影響は少ないと思われるが、水田における耕作の影響は不明である。殺虫剤の使用をできるだけ控えることが望ましい。
**【引用文献】**井上尚武（1983, 2005）／松谷賢次（1997）
**【写真】**P.171

（井上尚武）

オオクサキリ

## A　カスミササキリ　キリギリス科

国：掲載なし
千：A－A－A

*Orchelimum kasumigauraense* Inoue, 2000

**【種の特性】**ササキリ属に似るが、体が大きく雌の産卵器が上側に湾曲している。国内で産地が極限され、生息地のヨシ原が減少している。隔離分布する。本属は本来北米大陸に20数種分布する仲間で、産卵器は似ているものの形態から受ける全体的な印象はかなり異なる。同じ属かどうかは今後の検討を要する。
**【分布】**本州（宮城、福島、茨城、埼玉、千葉、新潟）
**【県内の状況】**我孫子市（井上 2002）、柏市、銚子市（井上 2000）から記録がある。手賀沼や利根川の河川敷のヨシ原のみで発見されているが、いずれも個体数は少ない。生息地のヨシ原が河川の改修、水質汚濁によって減少している。
**【保護対策】**ヨシ原は水質浄化の働きもあるので、ヨシ群落の保全が望ましい。
**【引用文献】**井上尚武（2000, 2002）
**【写真】**P.171

（井上尚武）

カスミササキリ

## A　オオオカメコオロギ　コオロギ科

国：掲載なし
千：A－A－A

*Loxoblemmus magnatus* Matsuura, 1986

**【種の特性】**オカメコオロギの仲間では最も大きく、ミツカドコオロギ位の大きさである。太く丸みのある大きい声で「ルッ・ルッ・ルッ」と鳴く。やや乾いた草地や雑木林の縁などに稀に生息する。
**【分布】**本州、九州。国内の産地が極限され、現在９都県から記録があるが、各都県とも１ヶ所から数ヶ所という隔離分布をする。
**【県内の状況】**従来君津市から記録されていたが(井上 1998)、近年白井市からも発見された(内田 2009)。君津市の産地は個体数が少ない。生息地は雑木林の近くの畑や乾いた草原的な環境である。昔から行われている里山の維持管理が必要である。
**【保護対策】**できる限り雑木林と草地の混じった環境を残すことが望ましい。
**【引用文献】**井上尚武（1998）／内田正吉（2009）
**【写真】**P.171

（井上尚武）

オオオカメコオロギ

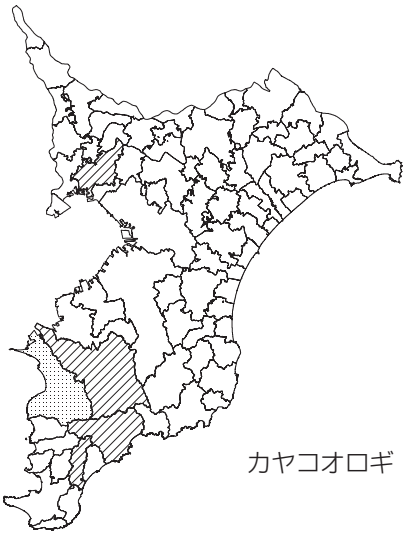
## A　カヤコオロギ　マツムシ科

国：掲載なし
千：A－A－A

*Euscyrtus japonicus* Shiraki, 1930

**【種の特性】**体は黄色で、翅が腹部の中央までしかない。雄でも鳴くしくみを持っていない。雌は長い産卵器を持つ。比較的乾いた自然度の高い草地や牧草地に稀に生息する。生息地では群生する傾向がある。
**【分布】**本州～九州、伊豆諸島。朝鮮。
**【県内の状況】**船橋市(船橋市環境部 1995)、白井市(内田 2009)、丸山町、富津市、鴨川市、南房総市（和田2010）から記録がある。自然度の高い草地が開発によって破壊されつつあるが、特別な対策はとられていない。人工的な牧草地に生息する例があるので、むしろ人為的な影響が好結果をもたらすこともあるようである。
**【保護対策】**生息地の草地の管理を従来通り継続することが望ましい。
**【引用文献】**船橋市環境部（1995）／内田正吉（2009）／和田一郎（2010）
**【写真】**P.171

（井上尚武）


カヤコオロギ

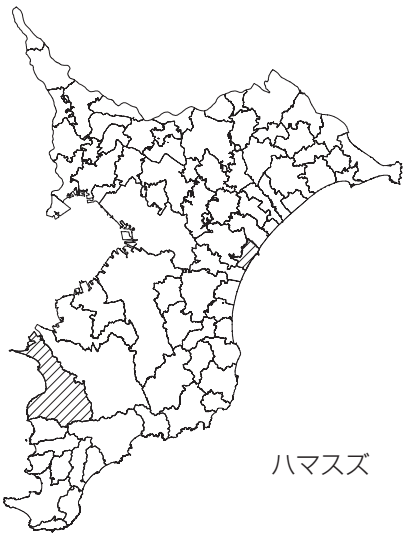
## A　ハマスズ　ヒバリモドキ科

国：掲載なし
千：X－A－A

*Dianemobius csikii* (Bolivar, 1901)

**【種の特性】**体長8mm内外。灰白色の地に褐色のまだらがある。生息地の砂浜に合わせた体色をしている。全国的には主に自然度の高い海岸の、まばらに草の混じった砂浜に特異的に生息するコオロギであるが、海岸の開発と砂浜の後退によって減少している。
**【分布】**北海道～九州、奄美大島。中国、ウスリー、モンゴル、ミャンマー、インド、スリランカ。
**【県内の状況】**従来の県内の記録は富津市大貫海岸(古川 1948)のみで、その後記録がなく絶滅したとされたが、近年富津市(高野 2003)および九十九里町(千葉県環境生活部自然保護課 2003)から確認された。
**【保護対策】**河川の護岸工事によって海岸への砂の供給が減少し、本種の絶滅の一因になっていると考えられるので、砂浜の減少を食い止めるとともに、海浜を保全することが望ましい。
**【引用文献】**古川晴男（1948）／高野　徹（2003）／千葉県環境生活部自然保護課（2003）
**【写真】**P.171

（井上尚武）


ハマスズ

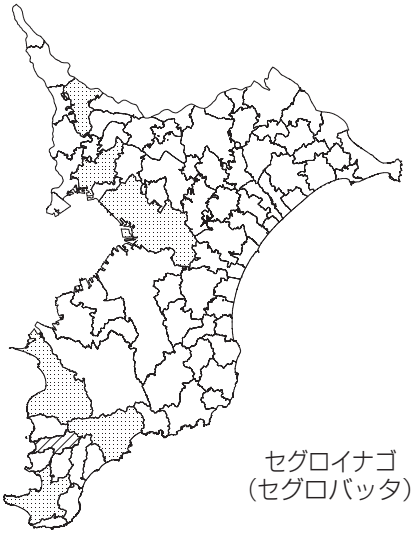
## A　セグロイナゴ（セグロバッタ）　バッタ科

国：掲載なし
千：A－A－A

*Shirakiacris shirakii* (Bolivar, 1914)

**【種の特性】**体は褐色で前胸の背面が濃褐色。広い面積の草原に生息する場合が多いようで、山口県秋吉台のような環境に群生する。一大群生地である秋吉台では毎年火入れを行って、草原の状態を維持している。しかしそのような草原が非常に減少しているので、現在本種の生息地も減少している。
**【分布】**本州～九州。朝鮮、中国。
**【県内の状況】**柏市（古川 1943）、船橋市(石栗 1957, 坂井 1962, 船橋市 1991)、千葉市（和田ほか 1973)、鴨川市（大木 1944)、富山町、高宕山（大野 1974)、館山市(中山 1964)などから記録があるが、いずれも近年記録がない。船橋市は都市化の著しい地域なので、生息の可能性は少ないと考えられる。
**【保護対策】**ススキやシバの優占する草原に生息するので、草原の維持管理を行うことが望ましい。草原は放棄すれば遷移が進行するので、それを食い止めるために定期的な草刈りや火入れなどの管理をすることが大切である。
**【引用文献】**古川晴男（1943）ほか
**【写真】**P.171

（井上尚武）



セグロイナゴ
（セグロバッタ）

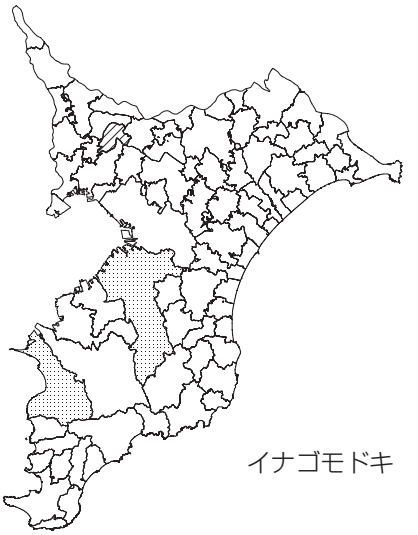
## A　イナゴモドキ　バッタ科

国：掲載なし
千：無－A－A

*Mecostethus parapleurus* (Hagenbach, 1822)

**【種の特性】**体長（翅端まで）雄25 ～ 27mm、雌25 ～ 30mm。体色は黄緑色、黄褐色、褐色の３型がある。イナゴ類に似るが前胸背部の黒い帯が前翅までつながる。山間部の湿地や草原にすむ。しばしば牧草地にも進出する。年１化で６～８月に見られる。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州。旧北区全域。
**【県内の状況】**古くは50年以上前に高宕山から記録があるが（依田,1955)、ニホンザルの餌として記録されたもので標本や写真が残されておらず確認できなかった。市原市高滝からも記録があるがリストのみで詳細が不明であった（田辺,1980)。近年白井市の牧草地から発見され（谷川ら,2004,内田,2009)、県内の生息が確実になったため今回の改訂版で掲載した。現在ここが県内唯一の生息地となっている。
**【保護対策】**生息地は現在牧草地として利用されているので、今後も農薬使用に配慮した牧草地の維持管理が必要である。
**【引用文献】**依田恭二（1955）／田辺盛光（1980）／谷川正樹ほか（2004）／内田正吉（2009）
**【写真】**P.171

（井上尚武）



イナゴモドキ

## A　ヤマトマダラバッタ（ヤマトバッタ）　バッタ科

国：掲載なし
千：A－A－A

*Epacromius japonicus* (Shiraki, 1910)

**【種の特性】**体は黄褐色で暗褐色の細かい点を散布する。砂浜の砂の模様に擬態している。自然度の高い、草のまばらな海浜にのみ生息するが産地が限定される。マダラバッタに似るが本種よりも内陸にすみ、両種は混生しない。
**【分布】**本州～九州。
**【県内の状況】**富津市、岬町から記録がある。富津市は海水浴場の近くなので、ゴミや車両の乗り入れが多く、環境は悪化しており個体数も少ない。岬町の生息地は狭いため車両の乗り入れができず、また遊泳禁止のため人の出入りが少なく、環境は比較的安定しており個体数の密度も高い。
**【保護対策】**砂浜の減少を止めるとともに生息地の海浜への車両の進入を制限し、ゴミの投棄を防ぐことが望ましい。
**【引用文献】**和田一郎（1995）／西村正賢（1999）／井上尚武（1998）
**【写真】**P.171

（井上尚武）

ヤマトマダラバッタ
（ヤマトバッタ）

## B　ヒサゴクサキリ　キリギリス科

国：掲載なし
千：B－B－B

*Palaeoagraecia lutea* (Matsumura et Shiraki, 1908)

**【種の特性】**体長は翅端長41-52㎜。全身淡褐色で、瓢箪（ひさご）型の濃褐色紋や顔面の緑色山形紋、特異な産卵器形状や鳴き声により、他属の種と区別される。メダケ、マダケなどの竹林に生息し、海岸に近い地域に見つかることが多い。夜間地上から這い出し、竹上に登って若芽を食害する。鳴き声は「ジッ・ジッ」と聞こえる。卵越冬年1化。成虫は8月から9月頃に出現する。
**【分布】**本州（日本海側は山口県のみに記録があり、太平洋側は千葉県以南）～九州、伊豆諸島。
**【県内の状況】**鴨川市（和田 2000）、富津市、君津市、鋸南町（和田 2010）、白浜町(井上2002)から記録がある。分布が北上していると言われ、現在の北限は君津市辻森である（和田 2010）。
**【保護対策】**メダケ林に生息するので、生息地のメダケ林の保護が望ましい。
**【引用文献】**和田一郎（1993, 2010）／井上尚武（2002）
**【写真】**P.172

（井上尚武）

ヒサゴクサキリ

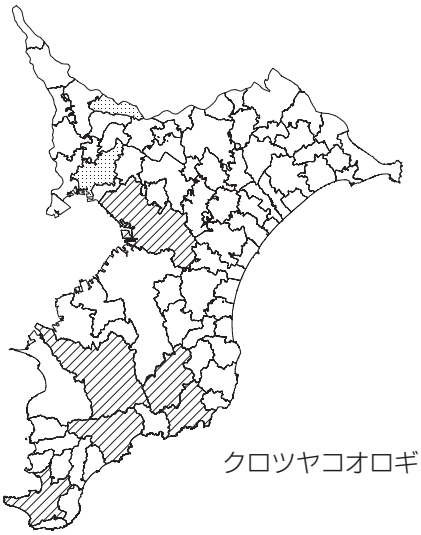
## B　クロツヤコオロギ　コオロギ科

国：掲載なし
千：A－A－B

*Phonarellus ritsemai* (Saussure, 1877)

**【種の特性】**全身が黒く、体長18mm位のやや大きいコオロギである。南向きの畑の土手に穴を掘って生活する。幼虫で越冬し、成虫は5月頃から7月頃までの間に出現し、夕方頃よりキチキチキチと高い声で鳴く。国内の産地が限定され茨城県高萩市が北限である。隔離分布することから遺存種と考えられる。
**【分布】**本州（茨城県以南）～九州。
**【県内の状況】**県内からは我孫子市や船橋市(加藤 1932）などから記録があったが詳細は不明であった。近年館山市、勝浦市、鴨川市での生息が確認された（和田 2010）。2010年、君津市八重原、大多喜町石神でも鳴き声を確認した(井上 未発表)。以上の状況によりランクをAからBに変更した。
　生息地は水田周辺が多いようであるが、時に市街地付近の土手などにも生息し、地中に穴を掘って潜んでいる。
**【保護対策】**水田や畑地などの斜面の植生を草地のまま保全することが望ましい。
**【引用文献】**加藤正世（1932）／和田一郎（2010）
**【写真】**P.172

（井上尚武）



クロツヤコオロギ

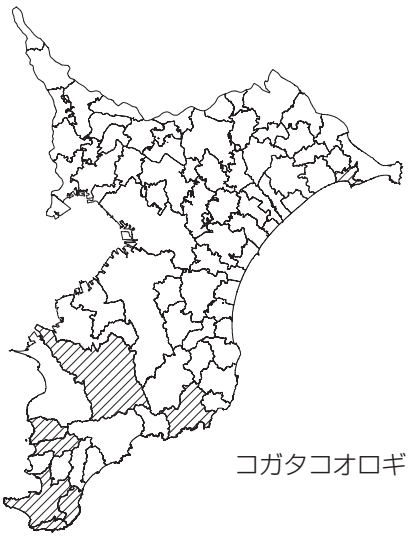
## B　コガタコオロギ　コオロギ科

国：掲載なし
千：B－B－B

*Velarifictorus ornatus* (Shiraki, 1913)

**【種の特性】**ツヅレサセコオロギに非常によく似ているが、シバやチガヤの生えた乾いた土地の地面に生息し、成虫は6月頃から鳴く。鳴く季節が早いのと、「ビーッ」という声を間隔をおいて発するので区別できる。
**【分布】**本州～九州。台湾。
**【県内の状況】**千葉県は北限に近いため比較的生息地が少ない。君津市、富山町、鋸南町、館山市、南房総市、勝浦市から記録がある（西村1999, 井上 2002, 和田 2010）。主に海岸付近の乾いた所に生息するが、開発によって生息環境が破壊されつつある。
**【保護対策】**生息地であるやや乾燥気味のシバやチガヤの草地の保全が望ましい。
**【引用文献】**西村正賢（1999）／井上尚武（2002）／和田一郎（2010）
**【写真】**P.172

（井上尚武）



コガタコオロギ

## B　リュウキュウチビスズ（ヤマトチビスズ）　ヒバリモドキ科

国：掲載なし
千：A－A－B

*Pteronemobius sulfurariae* Chopard, 1931

**【種の特性】**マダラスズ位の大きさで、体色は一見ヤチスズに似ているが、脚に白色の斑紋がある。大きな湿原のヨシ原の地上に生息する。8月頃から成虫が出現し、ジーッ、ジーッという地味な声で鳴く。同じ場所にすむヤチスズよりやや小型で脚などの白い斑紋がヤチスズより目立つことで区別できる。
**【分布】**本州（新潟、茨城、千葉）、琉球。スマトラ。九州以北では新潟、茨城、千葉の3県のみ。
**【県内の状況】**奄美大島以南ではススキ原などに生息するが、本州では大河川の河川敷や湖のヨシ原に生息する。県内からは従来木更津市小櫃川の河口から発見されていたが、近年、香取市、東庄町、銚子市の利根川流域の河川敷に多数生息することが確認された（井上 2009）。以上の状況からランクをAからBへ変更した。
**【保護対策】**水質汚濁などによってヨシ原の環境が悪化しているので、ヨシ原の保全に務めるとともにゴミの投棄を防ぐことが望ましい。
**【引用文献】**井上尚武（2009）
**【写真】**P.172

（井上尚武）

リュウキュウチビスズ
（ヤマトチビスズ）

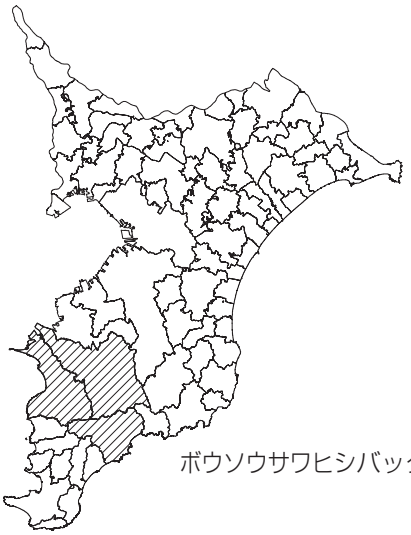
## B　ボウソウサワヒシバッタ　ヒシバッタ科

国：掲載なし
千：B－B－B

*Tetrix wadai* Uchida et Ichikawa, 1999

**【種の特性】**ハラヒシバッタに似るがやや小型で、体の色も灰色がかっていて、より地味である。房総半島南部の丘陵地帯の林縁や林道に稀に生息し、成虫は6月頃から出現し交尾もこの時期に行う。
**【分布】**本州（千葉県）。
**【県内の状況】**君津市、富津市、鴨川市から記録があるが（Uchida & Ichikawa 1999,井上 2002）、今のところ房総半島以外からは発見されていない。日の当たる林内の空き地や林道の地上にすむが、生息地は局地的である。今のところ大幅な環境の改変はない。
**【保護対策】**大規模な森林の伐採は避けることが望ましい。
本種の生息環境は群落の遷移から見ると一時的な環境なので、場合によっては定期的に草を刈り取るなどの管理をすることが望ましい。
**【引用文献】**Uchida & Ichikawa（1999）／井上尚武（2002）
**【写真】**P.172

（井上尚武）


ボウソウサワヒシバッタ

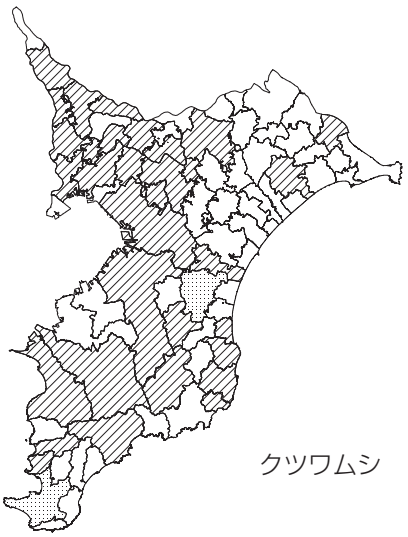
## C　クツワムシ　クツワムシ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Mecopoda niponensis* (de Haan, 1843)

**【種の特性】**古くから知名度が高く、唱歌にも歌われた国民的関心度の高い鳴く虫であるが、実際は産地も個体数も少ない種類である。里山の維持管理が本種の生息地を広げたと考えられる。近似種にタイワンクツワムシがいるが、静岡県以西に分布するので誤ることはない。
**【分布】**本州（福島県南部）～九州、対馬。
**【県内の状況】**県内では雑木林や河川敷のやぶなどに生息する。分布上の記録は多いが、いずれの生息地もピンポイント的で個体数も少ない。開発や管理放棄による雑木林の減少や荒廃によって個体数が減少しつつある。
**【保護対策】**里山の保全や、河川敷の植生の保全が望ましい。
**【引用文献】**南房総動植物調査団・千葉県環境部自然保護課（1990）ほか
**【写真】**P.172

（井上尚武）


クツワムシ

## D　ナツノツヅレサセコオロギ　コオロギ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Velarifictorus grylloides* (Chopard, 1969)

**【種の特性】**ツヅレサセコオロギと鳴き声や形態が非常によく似ているが、鳴き声はやや丸みを帯びている。幼虫で越冬し初夏に成虫が出現する。ツヅレサセコオロギとの交雑実験では子孫が生まれるが、生活史が異なるので自然状態では交雑の機会がなく、別種とされている。
**【分布】**本州（千葉県以南）～九州。
**【県内の状況】**従来千葉県南部に生息することが知られていたが（松浦1978）、その後具体的な産地として富山町伊予ヶ岳から記録された（和田 2000）。井上（未発表）は2002年6月30日に南房総市千倉町（鳴き声）、館山市西長田（3♀採集および鳴き声）で確認した。さらに鋸南町、長南町、南房総市白浜町、勝浦市、鴨川市から記録があり、現在長南町市野々が北限という（和田2010）。
**【保護対策】**生息地の環境を現状のまま保存することが望ましい。
**【引用文献】**松浦一郎（1978）／和田一郎（2000）
**【写真】**P.172

（井上尚武）

ナツノツヅレサセコオロギ

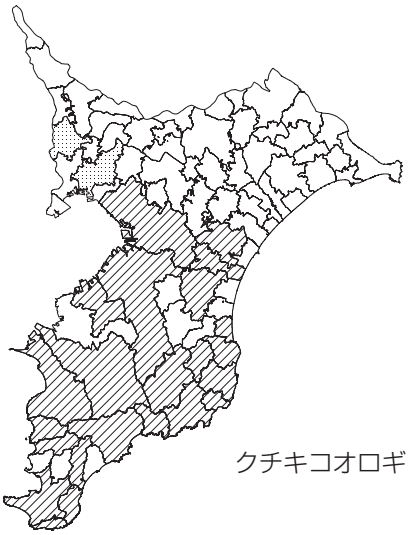
## D　クチキコオロギ　マツムシ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Duolandrevus ivani* (Gorochov, 1988)

**【種の特性】**体長22mm、産卵器13mm。頭と前胸背はつやのある黒色で、他の部分は暗褐色。脚は淡色だが、ひざの部分は褐色。翅は短く、腹部中央に達しない。卵は5、6月にふ化し、幼虫で越冬する。翌年の夏から秋に成虫になる。雌はもう一度冬を越して、翌春に産卵する。朽ち木の穴や木の皮の下などにすみ、夜間「グリー、グリー」と間隔をおいて鳴く。林の中で鳴くモリオカメコオロギは、11月頃の気温が低いときは本種と似ていることがあるので、初心者が鳴き声のみで調査する際は注意を要する。
**【分布】**本州～琉球、伊豆諸島、隠岐。
**【県内の状況】**かつては松戸市（辻 1952）と船橋市（坂井 1962）から記録があったが、近年の都市化による生息地の破壊のためか、その後記録がない。現在、市原市以南の房総丘陵地帯の各地から多数の記録があり（大野1976,1977など）、井上（2002）は県内の分布図を示した。極相林である常緑広葉樹林や社寺林の中に生息し、個体数は少なくない。
**【保護対策】**生息地である常緑広葉樹林や常緑樹を優占種とする社寺林を保護することが望ましい。
**【引用文献】**大野正男（1976, 1977）／井上尚武（2002）ほか
**【写真】**P.172

（井上尚武）



クチキコオロギ

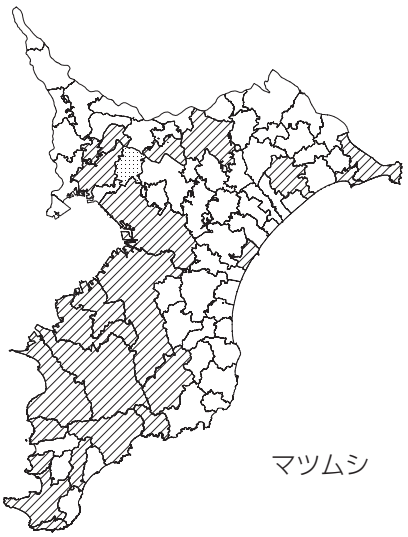
## D　マツムシ　マツムシ科

国：掲載なし
千：C－C－D

*Xenogryllus marmoratus* (de Haan, 1844)

**【種の特性】**体は黄褐色で、チガヤやススキの草原にすみ、秋にチンチロリンと鳴くことでよく知られている。福島県からも記録があるが、現在太平洋側の確実な産地としては茨城県が北限にあたる。知名度の割には県内では少ない。
**【分布】**茨城県以西（日本海側では新潟県以西）である。
**【県内の状況】**銚子市、成田市、飯岡町、八日市場市、船橋市、君津市、鴨川市、館山市などから記録がある。互いの産地が離れている。県南部の鴨川市あたりの海岸付近や山沿いには比較的多いが、県北部の内陸部では非常に少ない。海岸では主にチガヤなどの乾いた草原に生息するが、内陸の生息地ではアカマツのまばらに生えたススキの優占する群落や、グランドのそばに見られる。
**【保護対策】**生息地であるススキやチガヤ群落を保護することが望ましい。海岸以外の生息地では定期的な刈り入れなどの管理が必要である。
**【写真】**P.172

（井上尚武）



マツムシ

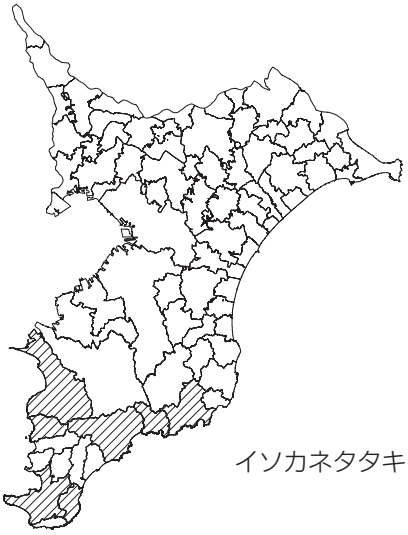
## D　イソカネタタキ　イソカネタタキ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Ornebius bimaculatus* (Shiraki, 1930)

**【種の特性】**形はカネタタキに似るが、色や模様は薄くやや大型である。雄の翅に小さい一対の黒い紋がある。磯の近くの草地や灌木の葉の上に生息する。鳴き声はカネタタキと異なり、チリチリチリという連続音である。
**【分布】**本州（千葉県南部以西）～琉球。台湾。
**【県内の状況】**県南部の海岸地帯に分布し、生息地では個体数は多いが、調査不足のためか分布記録は少ない。自然度の高い海岸が減少しつつあり、ゴミなどの投棄も加わって生息環境が悪化している。
**【保護対策】**大幅な海岸の環境改変がなければ絶滅の恐れはないので、生息地の植生を保全することが望ましい。
**【引用文献】**古川晴男（1948）ほか
**【写真】**P.172

（井上尚武）



イソカネタタキ

# ナナフシ目

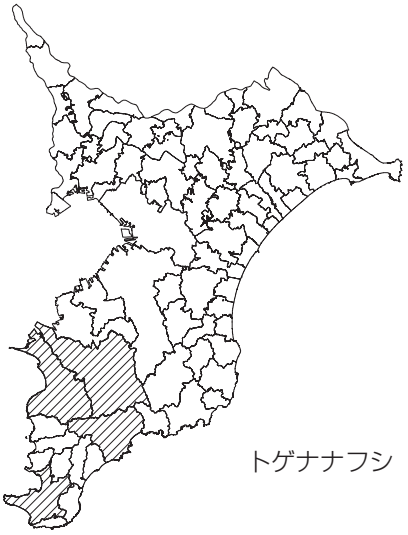
## C　トゲナナフシ　ナナフシ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Neohirasea japopnica* (de Haan, 1842)

**【種の特性】**雌の体長57-75mm。野外では雄は知られていない。翅がなく、灰褐色。触角は前脚より長い。背面に小さい突起が多くあり、体にとげがあるが個体によって差が大きい。これらのとげが人を刺すことはない。雑木林の縁などにすみ、初春から秋遅くまで見られる。主に地上に生息するが幼虫は草に登ることが多い。沿岸部から低山地の林の縁や林内を好むが、秋には林道に出てくることが多い。アザミ類やバラ類などを食べる。
**【分布】**本州（千葉県以南）～奄美大島、伊豆諸島（八丈島・三宅島）。
**【県内の状況】**君津市山滝野と富津市桜井付近から記録がある。君津市の生息地は雑木林のそばが宅地開発されている。また付近にはゴルフ場が多い。調査不足のためか分布記録が少ない。
**【保護対策】**適度に管理された雑木林を保全することが望ましい。
**【引用文献】**井上尚武（1998）ほか
**【写真】**P.172

（井上尚武）



トゲナナフシ

# カメムシ目

## X　ヤスマツアメンボ　アメンボ科

国：掲載なし
千：C－B－X

*Gerris isularis* (Motschulsky)

**【種の特性】**体長10-13mm。低山に生息するコセアカアメンボに似ているが、腹部の形が異なることで区別できる。山地性で低温の清流に生息しているが少ない。
**【分布】**北海道～九州。ロシア極東部。
**【県内の状況】**県内では唯一、清澄山からの記録（山崎，1989）があるのみであった。再発見時まで、ランクをXに変更する。
**【保護対策】**清澄山系の渓谷の維持と保護が望まれる。
**【引用文献】**山崎（1989）

（鈴木　裕）

ヤスマツアメンボ

## X　ベニモンマキバサシガメ　マキバサシガメ科

国：掲載なし
千：C－C－X

*Gorpis japonicus* Kerzhner

**【種の特性】**体長13mm前後の細長いカメムシで、淡黄緑色をし、紅色の斑紋が目立つが、死後変色する。山地に棲み、キリやクルミの葉上で小昆虫を捕らえるという。
**【分布】**本州～九州。
**【県内の状況】**1973年に富山町富山と館山市で採集されているが、その後、今日まで発見されていない。再発見時まで評価をXとする。
**【保護対策】**県内での分布、生態とも不明であるが、各地調査で見落とされている可能性もある。再発見時は周辺地域の適切な保全が望まれる。
**【引用文献】**前田（1973）

（鈴木　裕）

ベニモンマキバサシガメ

## X　アダチアカサシガメ　サシガメ科

国：掲載なし
千：A－A－X

*Haematoloecha adachi* Tachikawa

**【種の特性】**体長12mm前後。黒地に赤色の斑紋のある美しいサシガメで、同属のアカサシガメによく似ているが、本種は前胸背が黒いことにより区別される。
**【分布】**千葉県清澄山、高知県松葉川、伊豆諸島の神津島、御蔵島（立川，1988）。
**【県内の状況】**清澄山産の標本を基に新種記載されたサシガメであるが、千葉県においては現在まで追加記録が無く、従来の評価基準AをXにする。
**【保護対策】**山間部における休耕田やススキの原などの維持管理が望まれる。
**【引用文献】**立川（1998）

（鈴木　裕）

アダチアカサシガメ

## X　アカヘリサシガメ　サシガメ科

国：掲載なし
千：C－B－X

*Rhynocoris ornatus* (Uhler)

**【種の特性】**体長14mm前後。光沢のある黒色のカメムシで、前胸背の側縁と腹部外縁が鮮やかな赤色をしている。山地の植物上で採集され、ハムシなどの小昆虫を捕食するようである。
**【分布】**本州～九州。
**【県内の状況】**千葉県では1981年に八日市場市で得られたものが唯一の記録で、高い山のない千葉県での記録は珍しい。その後、今日まで再発見の記録はなく、B評価から不明種のXにする。
**【保護対策】**再発見時は、生息地周辺の保全が望ましい。
**【引用文献】**伊藤（1989）

（鈴木　裕）

## X　オオクチブトカメムシ　カメムシ科

国：掲載なし
千：無－B－X

*Picromerus bidens fuscoannulatus* Stal

**【種の特性】**体長15mm前後。黄褐色で前胸背の側角は同属のクチブトカメムシより長く突き出す。樹上で蛾の幼虫などを捕食するものと思われる。
**【分布】**本州。
**【県内の状況】**本種は山地性のカメムシで、2000年に富津市梨沢で採集された。高い山の無い千葉県で得られたことは分布上注目に値する。再発見時まで評価をXに変更する。
**【保護対策】**本県における分布や生態については不明であるが、再発見時には生息地付近の維持保全が望まれる。
**【引用文献】**山崎（2001a）

（鈴木　裕）

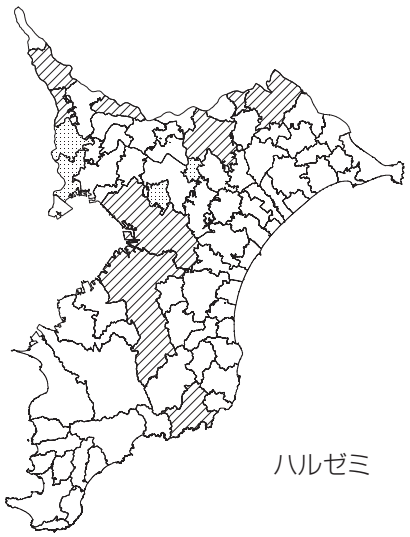
## A　ハルゼミ　セミ科

国：掲載なし
千：A－A－A

*Terpnosia vacua* (Olivier)

**【種の特性】**体長25mm前後。雄は共鳴室があるのでやや大きい。マツ林に多い、高木層にマツを交えた社寺林や屋敷林にも生息している。初夏に発生し、生息期間は短い。マツ林に生息しているので「マツゼミ」と呼ぶ地方もある。
**【分布】**本州～九州。
**【県内の状況】**1950-1965年頃まではマツ林や社寺林のマツの梢で泣いているのを容易に確認出来た。その後、マツ材の需要減少によりマツ林の減少や放置、開発による減少、社寺林の荒廃などにより極端に減少した。また、生息期間が短く、鳴く時間と天候が限定的なので確認記録は少ないが、松井英子（1994）の我孫子市、久保（1995）による千葉市、流山市や松井英子・松井安俊（1996, 2001）では千葉市の他、成田市、栄町、野田市、柏市、沼南町、佐原市などから記録している。
**【保護対策】**マツ、特にアカマツ林の下草刈りなどの維持管理が望ましい。
**【引用文献】**松井英子（1994）／久保（1995a）／久保（1995b）／松井・松井（1996）／松井・松井（2001）／高橋編（2001）／鈴木智史（2004）

（鈴木　裕）



ハルゼミ

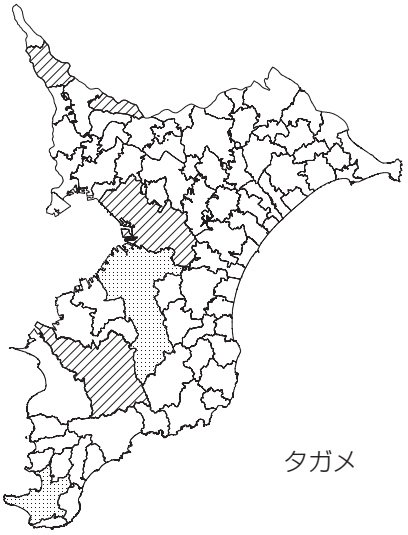
## A　タガメ　コオイムシ科

*Lethocerus deyrolli* (Vuillefroy, 1864)

国：絶滅危惧Ⅱ類（VU）
千：A－A－A

**【種の特性】**体長60mm前後、時に70mmになるものもある。主に水中で生活するが越冬時は陸に上がる。小魚や他の水生昆虫，カエル等が住む水田や池沼が生活の場となる．1950年頃までは普通に見られたが，農薬の使用によりこれら水生生物とともに激減した．最近、研究者の探索により記録は増えつつある。時に灯火へも飛来するようである。
**【分布】**本州～九州、沖縄。
**【県内の状況】**古くは我孫子市と館山市から記録（いづれもデータ不詳）されているが，近年では1979年の市原市と1989年の野田市での2例しかなかった。山崎（2001）により館山市産の1998年の標本が発見された。更に、鈴木智史（2001）により君津市で発見された。その後今日まで、追加記録はない。なお本種は、全国的にペットとして他地域のものが流通している可能性もあり、分布の取り扱いには充分な注意が払われなければならない。
**【保護対策】**山間で餌となる生物が豊富な場所が必要で、それらの地域から有害物質を排除することが望まれる。
**【引用文献】**成田（1979）／久保（1989）／鈴木智史（2001）／山崎（2001b）
**【写真】**P.173

（鈴木　裕）


タガメ

## A　コバンムシ　コバンムシ科

*Ilycoris exclamationis* (Scott)

国：絶滅危惧Ⅱ類（VU）
千：A－X－A

**【種の特性】**体長11mm前後。水中で生活するカメムシで楕円形をしている。ヒルやヒルムシロなどの浮遊植物の多い沼などに棲み、小さな魚や昆虫を捕食するという。
**【分布】**本州～九州。
**【県内の状況】**県内における本種の記録は、1981年に印旛沼で得られたものが唯一のものであったが、志賀（2006）により野田市船形で発見された。この記録は、千葉県のみならず南関東においても貴重な記録で、従来の評価基準Xを**A**にした。
**【保護対策】**池および周辺地域の現状維持が望ましい。
**【引用文献】**伊藤（1989）／志賀（2006）

（鈴木　裕）

コバンムシ

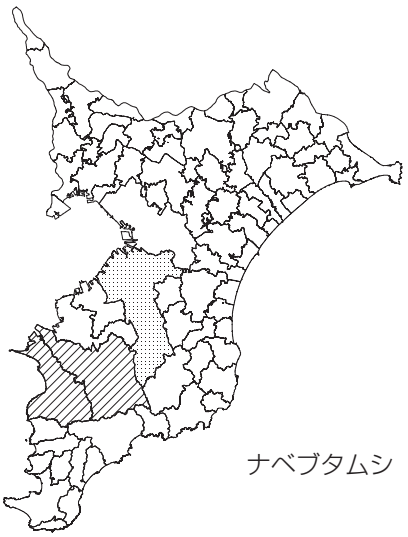
## A　ナベブタムシ　ナベブタムシ科

*Aphelocheirus vittatus* Matsumura

国：掲載なし
千：無－無－A

**【種の特性】**体長7mm前後。青味を帯びた暗褐色紋があるが、色彩は様々に変化がある。渓流にすむが砂の底や小岩の底などで主に生息する。成虫になっても水中の酸素を摂って呼吸することが出来るので生涯を水中で過ごすことが出来るという。
**【分布】**本州～九州。朝鮮。
**【県内の状況】**千葉県内では市原市での記録（1979）と君津市奥米（君津市，1996）の記録が過去の記録としてあるがその後発見が無かった。1998-1999年にかけ、富津市より成虫および幼虫が多数採集された（鈴木智史，2001）。
**【保護対策】**鈴木智史（2001）の発見は大変貴重なもので、同属のトゲナベブタムシは絶滅危惧Ⅱ類に指定されており、本種も評価基準をAとした。河川の渓流および周辺地域の現状維持をすることが望ましい。
**【引用文献】**成田（1979a）／君津市（1996）／鈴木智史（2001）
**【写真】**P.173

（鈴木　裕）


ナベブタムシ

## A　イトアメンボ　イトアメンボ科

*Hydrometra albolineata* Scott

国：絶滅危惧Ⅱ類（ＶＵ）
千：Ｃ－Ｂ－Ａ

**【種の特性】**体長13mm前後の細長いアメンボで不明な点が多いが、同属のヒメイトアメンボは初夏の頃より水田の稲の間や畦道の脇で見られることがあるので、本種もそのような環境に棲息していると思われる。
**【分布】**本州～九州。
**【県内の状況】**従来、本種として1962年の館山市の記録以降、市川市、佐原市、市原市、八千代市、八日市場市、富津市、木更津市、君津市、松尾町など多くの記録があるが、近縁のヒメイトアメンボと誤って同定されている可能性があり、確実な同定が行われたのは佐倉市（丸山ほか，2000）のものだけと思われる。それ故、ランクをＡとした。今後とも記録の積み重ねが必要であろう。
**【保護対策】**各地にある小さな池や沼、休耕田などを不用意に潰したり、転用することは十分な調査なくして実施しないことが望ましい。
**【引用文献】**丸山ほか（2000）

（鈴木　裕）

イトアメンボ

## A　ズイムシハナカメムシ　ハナカメムシ科

*Lyctocoris beneficus* (Hiura)

国：絶滅危惧Ⅱ類（ＶＵ）
千：無－Ｃ－Ａ

**【種の特性】**体長3･5mm前後。ハナカメムシの中では大型で、一見黒く見える。以前は、畑の積み藁の中のメイガの幼虫を食す益虫として、千葉県内でも普通に見られたというが
農薬の散布により激減し、現在では見ることが稀となった。
**【分布】**本州、四国、九州。ロシア、朝鮮、中国。
**【県内の状況】**農業の近代化とともに畑地に藁を積む光景は姿を消し、県内における本種の公式記録としては、山崎（1988）の我孫子市布佐の記録が唯一のものであったが、2003年に同じく我孫子市の岡発戸で１頭発見された（青木，2010）が、依然として重要な昆虫と思われ評価をＡにした。
**【保護対策】**再発見時は周辺地域の維持管理が望ましい。
**【引用文献】**山崎（1988）／青木（2010）

（鈴木　裕）

ズイムシハナカメムシ

## A　キュウシュウクチブトカメムシ　カメムシ科

*Eocanthecona kyushuensis* (Esaki et Ishihara)

国：掲載なし
千：Ａ－Ａ－Ａ

**【種の特性】**体長14mm前後。淡褐色の地に黒いまだら状の地味なカメムシであるが、前胸背に鋭い棘があり、それが2股に分かれている。蛾などの幼虫を捕食する。
**【分布】**本州～九州、三宅島、対馬、奄美大島。
**【県内の状況】**本州では山口、和歌山、静岡、神奈川などで記録があるが、神奈川県を除くといずれもその数は多くない。県内では清澄山から1978年に２例の発見があり、その後の記録と君津市の記録を合わせると狭い範囲で５例を数える。また、一宮町からも発見された（槐，2007）。日本における北東限として注目されるが、鳥越（2005）の市川市からの発見により北限記録が塗り替えられた。なお、渡辺（1975）は内浦山よりシモフリクチブトカメムシを記録しているが、本種の誤同定と思われる。
**【保護対策】**市川市や神奈川県での採集状況からは、本種は必ずしも山地性とはいえず社寺林などの古くからある市町村の常緑林を保全する方向が望ましい。
**【引用文献】**市田（1990）／鈴木裕（1998）／鳥越（2005）／槐（2007）
**【写真】**P.173

（鈴木　裕）

キュウシュウクチブトカメムシ

## B　ヒメミズカマキリ　タイコウチ科

国：掲載なし
千：A－B－B

*Ranatra unicolor* Scott

**【種の特性】**体長28mm前後。水中で生活するカメムシで、鎌状の前脚と腹端から伸びる2本の呼吸器が特徴である。同属のミズカマキリに比べ、浅くてきれいな環境を好むようである。
**【分布】**北海道～九州、沖縄本島。
**【県内の状況】**県内における記録は、ミズカマキリに比べ非常に少なく、1974年の高宕山（大野，1974）、1980年代の東金市、佐倉市および光町の4地点だけであったが、2000年に相次いで光町・乾草沼より発見され（鈴木智史，2001；信太，2001）、2005年にも再発見された（宮内，2005）。
**【保護対策】**光町の乾草沼のようなヒルやヒルムシロなどのある環境を積極的に残されることを要望する。
**【引用文献】**大野（1974a）／伊藤（1989）／伊藤（1996）／鈴木裕（1999）／鈴木智史（2001）／信太（2001）／宮内（2005a）
**【写真】**P.173

（鈴木　裕）

ヒメミズカマキリ

## B　エサキアメンボ　アメンボ科

国：準絶滅危惧（NT）
千：B－B－B

*Limnoporus esakii* (Miyamoto)

**【種の特性】**体長10mm前後の鮮やかな褐色のアメンボで、水草の多い池や沼の挺水植物の間に棲み、開けた水面には出ないというが、宮内（2005）は、水深の浅い土手際から採集している。
**【分布】**本州、九州。
**【県内の状況】**1977年佐倉市印旛沼で発見され（立川，1980）、1988年市川市から、1992年関宿町から発見された（山崎・鈴木，1999）。他にも鴨川市、八日市場市からの記録があった。その後しばらく記録が途絶えていたが、2005年に多古町での発見があった（宮内，2005）。
**【保護対策】**アシやガマなどの水草が広がる清流を取り戻すことが、本種の保護には大切であり、川や沼のコンクリート護岸にも本来の姿を考慮し工夫することが望ましい。
**【引用文献】**立川（1980）／立川（1985）／山崎・鈴木（1999）／丸山 ほか（2000）宮内（2005b）
**【写真】**P.173

（鈴木　裕）

エサキアメンボ

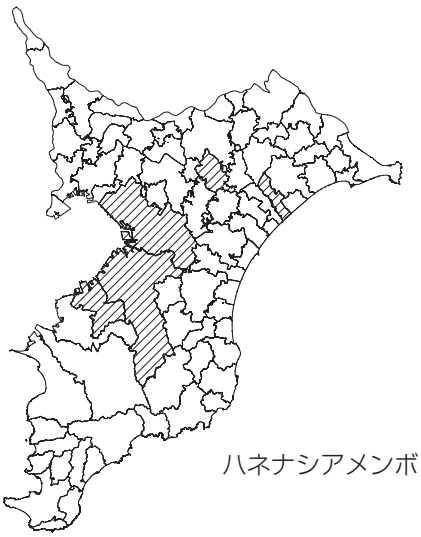
## B　ハネナシアメンボ　アメンボ科

国：掲載なし
千：C－B－B

*Gerris nepalensis* Distant

**【種の特性】**体長7-10mm。小型のアメンボで全体黒色である。普通は無翅型であるが、稀に長翅型が現われる。主に沼や渓流に生息する。宮内（2005）によれば、本種はジュンサイハムシの幼虫を餌としているという。
**【分布】**北海道～九州。台湾、朝鮮、中国、東南アジアなど。
**【県内の状況】**1993年に千葉市大百池で発見され（山崎，1993）、1996年には市原市から記録された。その後、袖ヶ浦市などからの記録があったが、2005年に光町の乾草沼で発見された。
**【保護対策】**沼の環境を壊さないような施策が求められる。
**【引用文献】**山崎（1993）／大木克行（1994）／山崎（1989）／伊藤（1996）／袖ヶ浦市史基礎資料調査会（1997）／宮内（2005c）／宮内（2005d）
**【写真】**P.173

（鈴木　裕）



ハネナシアメンボ

## B　キバネアシブトマキバサシガメ　マキバサシガメ科

国：掲載なし
千：無－B－B

*Prostemma kiborti* (Jakovlev)

**【種の特性】**体長9mm前後。身体は光沢のある黒色で、同属のアシブトマキバサシガメと同様に乾いた草地の地表の石の下やごみの下などに棲み、小昆虫類を捕食する。
**【分布】**北海道～本州。
**【県内の状況】**全国的にも記録の少ない種で、県内では2000年に佐倉市で初めて発見された（丸山ほか，2000）。その後，青木（2003，2004）により我孫子市から記録され、富津市や印旛村も発見された。なお、アシブトマキバサシガメも余り多い種ではない。
**【保護対策】**数年放置された草地も不用意に整地されることがないよう要望する。
**【引用文献】**丸山ほか（2000）／青木（2003）／青木（2004）／宮内（2005e）
**【写真】**P.173

（鈴木　裕）

キバネアシブトマキバサシガメ

## C　ケシウミアメンボ　カタビロアメンボ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Halovelia septentronals* Esaki

**【種の特性】**体長1.5-2mm。黒い小さなアメンボで、海岸の岩礁地帯の海面を漂うように泳ぎ、群棲が見られることもある。時に岩礁の水溜りでも見ることがある（宮内，2008）。
**【分布】**本州～九州、琉球。
**【県内の状況】**県内で最初に発見された地点は鴨川市江見吉浦海岸（山崎・鈴木，1999）で、次いで1997年に東京湾側の富津市金谷から発見され、2006年にも吉浦海岸から再記録された（宮内，2008）。海に囲まれた本県ではさらに多くの産地が判明するものと思われる。
**【保護対策】**本種の生息地である海岸の岩礁地帯をむやみに人工物に変えることのないような施策が望まれる。
**【引用文献】**山崎（1997a）／宮内（2008）
**【写真】**P.173

（鈴木　裕）

ケシウミアメンボ

## C　クロバアカサシガメ　サシガメ科

国：掲載なし
千：D－C－C

*Labidocoris insignis* Distant

**【種の特性】**体長12mm前後。光沢のある黒色のサシガメで、前胸背の後半部と革質部の外側が鮮やかな紅色で大変美しい種である。主に山地で採集されるが多くない。
**【分布】**本州～九州。
**【県内の状況】**全国的にも記録の少ない種で、千葉県からは1992年に船橋市で得られただけであったが、2002年君津市で再発見された（宮内，2003）。隣接の神奈川県ではかなりの個体数が記録されているので、千葉県においても採集されると思われる。
**【保護対策】**本種の生態は不明の点が多い。再発見時にはその環境を維持されることが望ましい。
**【引用文献】**鈴木裕（1999）／宮内（2003）
**【写真】**P.173

（鈴木　裕）

クロバアカサシガメ

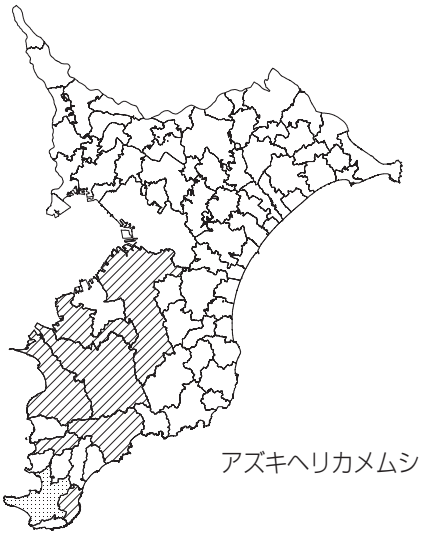
## C　アズキヘリカメムシ　ヘリカメムシ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Homoeocerus marginiventris* Dohrn

**【種の特性】**体長15mm前後。黒褐色の細長いカメムシで、同属のホシハラビロカメムシに似ているが、体の幅が狭く結合板の各節に小さな黒紋がある。アズキやダイズの害虫として知られていた。
**【分布】**本州～琉球。
**【県内の状況】**古くは1943年に鴨川市で記録され（大木，1943），1961年富山町で、1962年には館山市での記録があった。その後、永い間記録が途絶えていたが、君津市、市原市、木更津市、富津市、千倉町や鴨川市内浦山でも記録された。
**【保護対策】**間違えやすい種なので分布状態や生態も含め、発見時に十分な観察が望まれる。
**【引用文献】**大木重二（1943）／中山（1962）／山崎（2002a）／槐（2007）

（鈴木　裕）


アズキヘリカメムシ

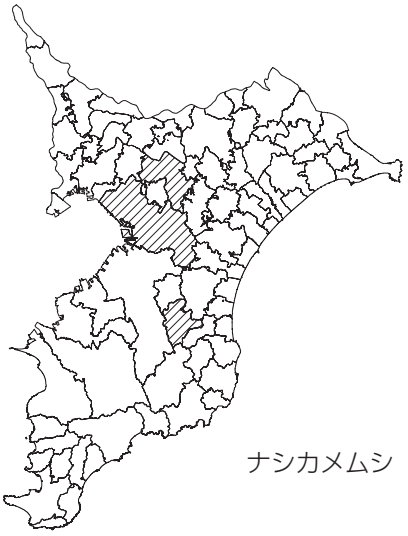
## C　ナシカメムシ　クヌギカメムシ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Urochela luteovaria* Distant

**【種の特性】**体長12mm前後。紫褐色をしたカメムシで、革質部の先端に緑がかった白色の紋がある。触角の第4，5節の半分が白色でよく目立つ。ナシ、リンゴ、ウメ、サクラなどの果実を吸汁し、産地では果実の害虫として知られる。
**【分布】**北海道～九州。
**【県内の状況】**1981年に千葉市で記録されているのみであったが、1995年佐倉市から記録された（丸山ほか，2000）。
**【保護対策】**ウメやサクラが県内各地には普通に分布するのに本種が採集できない要因として、農薬散布による激減があったと思われる。これらを必要以上に散布することがないよう望まれる。
**【引用文献】**千葉市（1989）／丸山ほか（2000）

（鈴木　裕）


ナシカメムシ

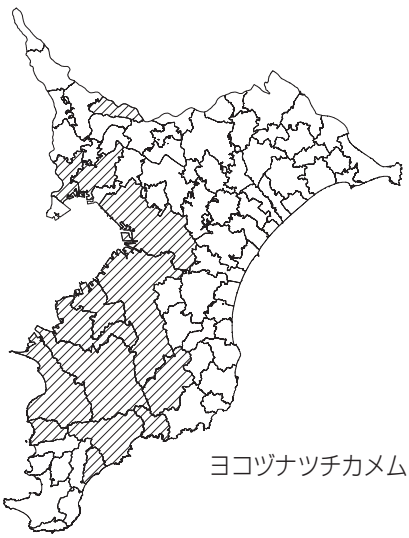
## C　ヨコヅナツチカメムシ　ツチカメムシ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Adrisa magna* (Uhler)

**【種の特性】**日本産のツチカメムシの中では最大種で、体長20mmになるものもあり和名も相撲の横綱からきている。体は黒色でやや光沢がある。
**【分布】**本州～九州、対馬。
**【県内の状況】**1985年鴨川市の記録（山崎，1989）の後、我孫子市、市川市、千葉市、君津市のほか県南部の内浦山、清澄山、木更津市、市原市など多くの地域で見いだされているが、市川市の例を除くといずれも採集個体数は少ない。近年では富津市、袖ヶ浦市、和田町での記録（宮内，2006）や船橋市の記録（小川，2009）がある。
**【保護対策】**最近では都市の中で記録されることも多く、町中にある社寺林をむやみに変えることのないよう要望する。
**【引用文献】**山崎（1989）／宮野（1994）／宮内（2006）／槐（2007）／小川（2009）
**【写真】**P.173

（鈴木　裕）


ヨコヅナツチカメムシ

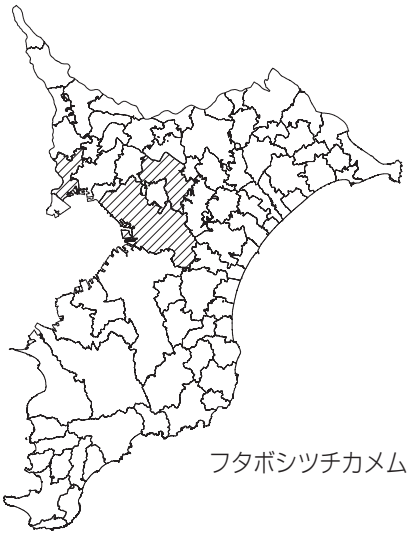
## C　フタボシツチカメムシ　ツチカメムシ科

*Adomerus rotundus* (Hsiao)

国：掲載なし
千：C－C－C

**【種の特性】**体長5mm前後。小さな黒色のカメムシで革質部に1対の白色紋がある。同属のミツボシツチカメムシは小楯板の先端も白いが、本種は黒いので区別できる。オドリコソウで採集される。ミツボシカメムシは各地に普通に居るが、本種の記録は少ない。
**【分布】**本州。
**【県内の状況】**ミツボシツチカメムシは多いが、本種の記録は少なく、千葉市での3例だけであったが、1998年に佐倉市，2002年に市川市から記録された。
**【保護対策】**里山的な環境を極力残すような施策が望ましい。
**【引用文献】**鈴木裕（1997）／丸山ほか（2000）／鈴木裕（2003）

（鈴木　裕）



フタボシツチカメムシ

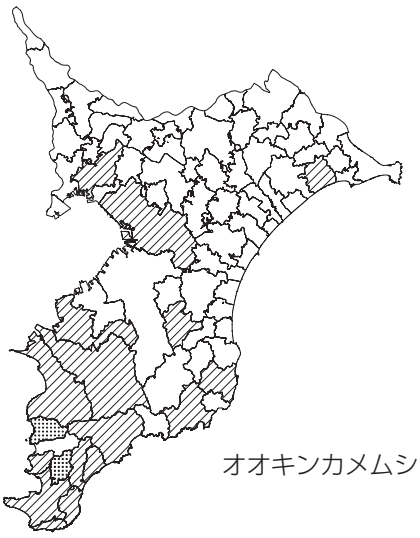
## C　オオキンカメムシ　キンカメムシ科

*Eucoryssus grandis* (Thunberg)

国：掲載なし
千：C－C－C

**【種の特性】**体長20mm前後。橙赤色の地に黒色の紋があるキンカメムシで、移動性が強く四国から関西まで飛んだことが確認されている。アブラギリの実を吸汁し、成虫は海岸付近のツバキ、トベラ、ミカン、マサキなどで集団越冬する。暖地性のカメムシである。
**【分布】本**州～琉球。
**【県内の状況】**1956年鴨川市で初めて記録された後、館山市、三芳村などに生息することが知られていたが、近年になって分布を広げ鋸南町、大房岬、白浜町、千倉町、丸山町、和田町など県南部地域の他、船橋市、君津市、長南町でも記録されるようになった。移動性が強いが、確実に世代を繰り返している地域として千葉県が北東限の地である。採集および目撃記録の過多からは、Dランク以下になると思うが千葉県を代表するカメムシの一つと考えられ、評価をCのままとした。
**【保護対策】**本種の食餌であるアブラギリの生える生息地と越冬地である海岸周辺部を保全することが望ましい。
**【引用文献】**諫川（1990）／鈴木裕（1999）／直海（2001）／直海（2002）／宮内（2004）／横田（2005）
**【写真】**P.173

（鈴木　裕）



オオキンカメムシ

## C　フタテンカメムシ　カメムシ科

*Laprius gastricus* (Thunberg)

国：掲載なし
千：無－C－C

**【種の特性】**体長12mm前後。小楯板の前側に黄白色の小斑点があるが、一見、黒褐色に見える地味なカメムシで、海岸近くのイネ科植物の根の周辺に生息する。
**【分布】**北海道～九州。
**【県内の状況】**1989年に山崎秀雄氏が富津市富津岬で得られたのが最初の記録である（鈴木，1999）。その後、信太（2003）により同じく富津市の金谷で得られたが、現在までこの2例のみであるが、上のような環境には棲息していると思われる。
**【保護対策】**本種の食餌であるイネ科植物の生える生息地を、安易に破壊することがないよう望む。
**【引用文献】**鈴木裕（1999）／信太（2003）

（鈴木　裕）

フタテンカメムシ

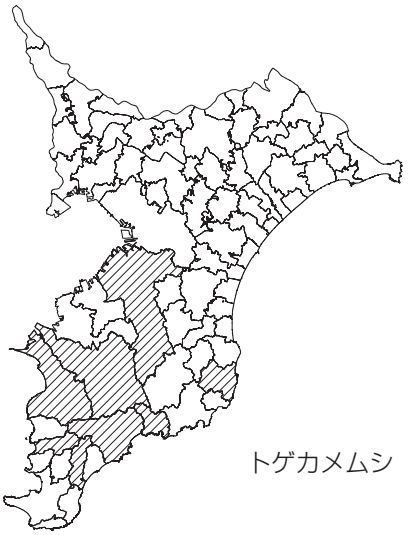
## C　トゲカメムシ　カメムシ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Carbula humerigera* (Uhler)

**【種の特性】**体長は8mmから12mmと幅がある。銅褐色の光沢があり、前胸背の側角が棘状に突き出している。山地のヨモギ類、ウド、タラノキなど多くの植物上で見られる。
**【分布】**北海道～九州。
**【県内の状況】**他県では山地に普通に見られるが、千葉県ではあまり多くない。鴨川市、丸山町、君津市、市原市、富津市、大原町、清澄山、内浦山など南部の山地からの記録がある。
**【保護対策】**千葉県内での分布、生態など不明な点があるが、県南部の山地の維持管理が望ましい。
**【引用文献】**川名（1986）／君津市（1996）／伊藤（1989）／山崎（1997b）／槐（2007）

（鈴木　裕）



トゲカメムシ

## C　トホシカメムシ　カメムシ科

国：掲載なし
千：D－C－C

*Lebia decempunctata* (Motschulsky)

**【種の特性】**体長20mm前後。大型のカメムシで前胸背に4個、小楯板に6個、合計10個の黒点を持つ。山地のニレ、ケヤキ、サクラなどの植物上で生活する。
**【分布】**北海道～九州。
**【県内の状況】**山地性の種で県内では少ない。1986年と1987年に清澄山から採集されている。この記録以降現在まで再発見の記録がなかったが、2008年と2010年同じく清澄山で確認された（城田・高橋, 2010）。
**【保護対策】**清澄山周辺山系からの再発見とともに、その地の自然状態を維持管理することが望ましい。
**【引用文献】**伊藤（1989）／城田・高橋（2010）

（鈴木　裕）

トホシカメムシ

## C　イネカメムシ　カメムシ科

国：掲載なし
千：無－C－C

*Lagynotomus elongatus* (Dallas)

**【種の特性】**体長12mm前後。イネ科植物で生息し、イネの害虫と知られるが、千葉県では被害は聞かない。シロヘリカメムシに酷似するが、頭部側葉が中葉より若干長く、左右側葉が接していないことにより区別できる。
**【分布】**本州～琉球。台湾、中国。
**【県内の状況】**1943年に鴨川市で記録された頃は、県内にも普通に産していたと思われる。その後千倉町（中山, 1962）、高宕山、太東崎（山崎, 1989）、八日市場（伊藤, 1989）があったが、最近では非常に少なく、久留里（山崎, 2002）、一宮町（槐, 2007）の記録があるのみである。
**【保護対策】**間違えやすい種なので、発見時は必ず採集し確認が望まれる。
**【引用文献】**大木（1943）／山崎（1989）／伊藤（1989）／山崎（2002a）／槐（2007）

（鈴木　裕）

## C　オオツノカメムシ　ツノカメムシ科

*Acanthosoma giganteum (Matsumura)*

国：掲載なし
千：無－無－C

**【種の特性】**体長18mm前後。鮮やかな緑色の美しいカメムシで、雄の側角は赤く大きく側方に突き出る。食樹はケンポナシを好み、時にミズキなどにも集まる。
**【分布】**本州～九州。台湾、朝鮮、中国。
**【県内の状況】**1994年に我孫子市で発見され（松井，1997）、その後、八千代市や市川市から記録され、2006年に我孫子市で再発見されたが個体数は多くない。樹林帯に住むと思われる本種が千葉市の海岸近くでも発見された（嶋本，2009）。
**【保護対策】**食樹であるケンポナシのある里山的環境を極力維持管理されるよう望む。
**【引用文献】**松井（1997）／山崎（2002b）／山崎（2003）／青木（2006）／嶋本（2009）
**【写真】**P.173

（鈴木　裕）

オオツノカメムシ

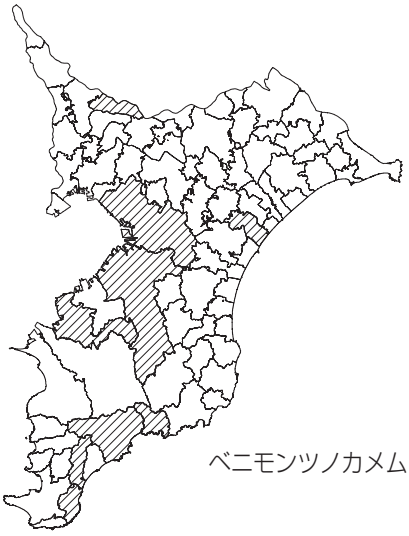
## C　ベニモンツノカメムシ　ツノカメムシ科

*Elasmostethus humeralis* Jakovlev

国：掲載なし
千：C－C－C

**【種の特性】**体長11mm前後。青緑色の地に暗赤色の斑紋のあるカメムシで、腹部背板は紅色で美しい。ハナウド、ウコギ、ヤシャブシなどの花上で採集されるというが、あまり多くない。
**【分布】**北海道～九州。
**【県内の状況】**本種は山地性のカメムシで、千葉市、成東町、丸山町、内浦山、大福山など少数の記録があるのみであったが、青木（2009）は、我孫子市でウコギの果実や葉上にいる多数の個体を確認している。
**【保護対策】**本県における分布、生態とも不明な点が多いが、生息地が発見された時には、その地の環境を維持することが望ましい。
**【引用文献】**伊藤（1989）／浅間（1990）／山崎（1996）／山崎（1998）／鈴木裕（1997）／山崎（1998）／青木（2009）
**【写真】**P.174

（鈴木　裕）


ベニモンツノカメムシ

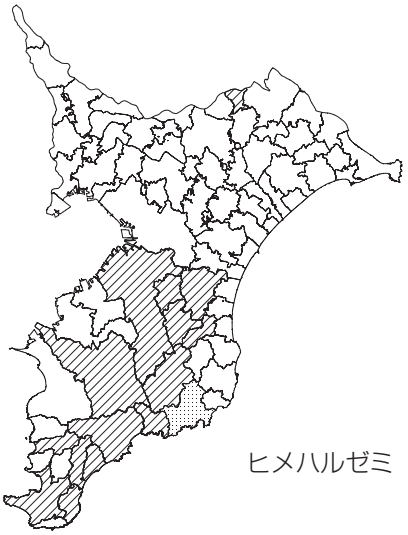
## D　ヒメハルゼミ　セミ科

*Euterpnosia chibensis chibensis* Matsumura

国：掲載なし
千：D－C－D

**【種の特性】**体長25mm前後。翅の透明な小型のセミで集団で生息する。スダジイなどの照葉樹林の優占する森林に多い。7月に出現し、生息期間は短い。暖地性の種である。
**【分布】**本州～九州。
**【県内の状況】**茂原市の八幡山は本種の北限として、また基準産地として国の天然記念物に指定されている。最近の公式記録は多くないが、2000年の調査時には十数か所の生息地が判明しており、多くの記録が蓄積されることが望まれる。
**【保護対策】**生息地の現状維持、社寺林および周辺環境の保全にも留意することが大切である。
**【引用文献】**枝（1971）／大野（1974b）／成田（1979b）／宮野ほか（1994）／山崎（1998）／和田（2010）

（鈴木　裕）


ヒメハルゼミ

## D　オオアメンボ　アメンボ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Aquarius elongates* (Uhler)

**【種の特性】**体長19-28mm。日本産アメンボでは最大の種で、体、肢ともに長く黒色で褐色を帯びることがある。主に河川の上流域の水の綺麗な場所に生育する。

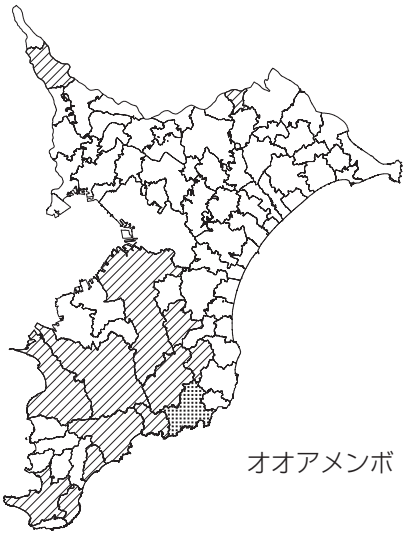
**【分布】**本州～九州。台湾、中国。

**【県内の状況】**本種の県内における正式な記録は多くないが､高宕山（1974)、鴨川市（山崎，1989)、市原市大福山（日新緑化，1993)、君津市（2002）など県中・南部の水温の低い清流には分布し、日差しの強い日中は木陰に集まる。

**【保護対策】**例え小さな小川でも無暗に手を加えたり、工事等で不必要に土砂などをためたりしないよう要望する。

**【引用文献】**大野（1974a）／山崎（1989）／日新緑化土地KK（1993）／君津市（1996）／山崎・鈴木（1999）／山崎（2002a）

（鈴木　裕）



オオアメンボ

## D　ヒメマダラナガカメムシ　ナガカメムシ科

国：掲載なし
千：D－D－D

*Graptostethus servus* (Fabricius)

**【種の特性】**体長8mm前後。体は黒色であるが、上翅の橙赤色の斑紋がさまざまに現れる美しいカメムシである。ヒルガオ科植物に寄生し、海岸の砂地のハマヒルガオには時に多数の個体が現われることがある。

**【分布】**本州～九州、琉球。台湾、東南アジア。

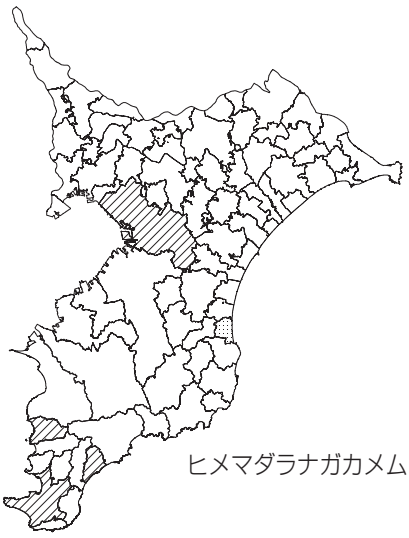
**【県内の状況】**1950頃一宮町で大量に採れたという（故・長谷川仁氏私信)。近年では1982年の館山市での記録（山崎，1989）のみであったが、1998年館山市の平砂浦海岸、鋸南町の保田海岸、和田町の海岸付近から採集された。それ以降記録が途絶えていたが、2009年千葉市稲毛の浜で発見された（嶋本，2010)。

**【保護対策】**砂浜海岸の砂防林を必要以上に狭めないようにするとともに、海岸付近での人的なゴミを排除し、海浜への車やオートバイなどの侵入を避ける施策を望む。

**【引用文献】**山崎（1989）／鈴木裕（1999）／嶋本（2010）

**【写真】**P.174

（鈴木　裕）



ヒメマダラナガカメムシ

## D　ヒメジュウジナガカメムシ　ナガカメムシ科

国：掲載なし
千：無－無－D

*Tropidothorax belogolowi* (Jakovlev)

**【種の特性】**体長8-9mm。体は橙赤色で頭部、前胸背、革質部の1対の紋、小楯板、膜質部などは黒色で、爽やかな感じのするカメムシである。あまり多く見られないが、時として群生する。ガガイモやフウセントウワタなどで見られることがある。

**【分布】**本州～九州、沖縄。中国。

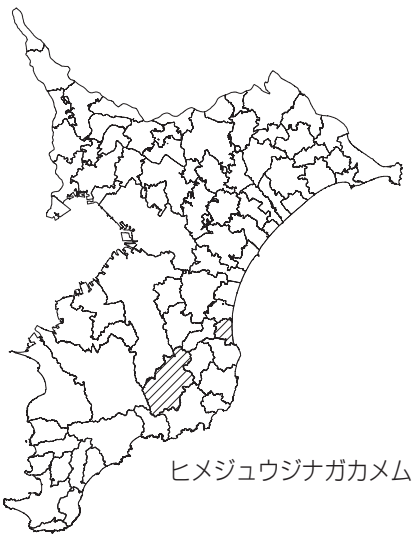
**【県内の状況】**県内の分布状況は不明で、僅かに宮内（2009）の大多喜町で採集された記録がある。なお、外観が本種に大変よく似たジュウジナガカメムシが、一ノ宮町から記録された（槐，2007)。

**【保護対策】**発見時は、周辺付近の保全が望ましい。

**【引用文献】**槐（2007）／宮内（2009）

**【写真】**P.174

（鈴木　裕）



ヒメジュウジナガカメムシ

## D　ハナダカカメムシ　カメムシ科

国：掲載なし
千：D－無－D

*Dybowskyia reticulata* (Dallas)

**【種の特性】**体長5mm前後。淡い褐色をしているが、一見黒く見える地味なカメムシである。セリ科のヤブジラミなどの実を好み、時に群生することもある。

**【分布】**本州～九州。中国、シベリア。

**【県内の状況】**1970年頃まではヤブジラミがあれば至る所で普通に見られたカメムシである。勝浦市、館山市、鴨川市、千葉市、佐倉市などから記録されているが、普通種であるためか公式記録は少ない。そのため、敢えてDランクに加えた。

**【保護対策】**食草のセリ科の多くは水田の畦道や林縁にあるが、水田や畑に散布される除草剤の影響があると思われ、農薬散布と同様に注意するよう要望する。

**【引用文献】**大木（1943）／大野（1975）／丸山ほか（2000）／青木（2003）／鈴木裕（2004）

（鈴木　裕）

ハナダカカメムシ

## D　ルリクチブトカメムシ　カメムシ科

国：掲載なし
千：無－無－D

*Zicrona caerulea* (Linnaeus, 1758)

**【種の特性】**体長6-8mm。体は一様の光沢のあるルリ色をした小型のカメムシで、畑の脇の雑草のある地表面で生活し、ハムシなどを捕食するという。

**【分布】**本州～九州、琉球。ほぼ世界じゅうに分布する。

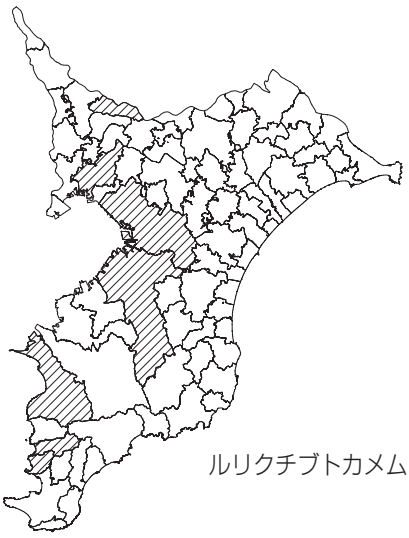
**【県内の状況】**地表面や雑草の根際などで生息するためか、採集例は少なく我孫子市、船橋市、千葉市、富津岬、市原市、富山町、高宕山など数例に過ぎない。

**【保護対策】**人間にとっては益虫なので、採集時はそのまま放置されるよう。

**【引用文献】**大野（1975）／山崎（1989）／伊藤（1989）／船橋市（2002）／青木（2003）

**【写真】**P.174

（鈴木　裕）



ルリクチブトカメムシ

# アミメカゲロウ目

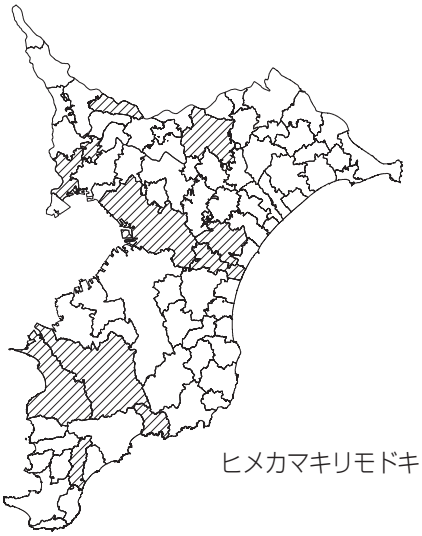
## B　ヒメカマキリモドキ　カマキリモドキ科

国：掲載なし
千：B－B－B

*Mantispa japonica* MacLachlan, 1875

**【種の特性】**体長8-14mm、翅は透明、前翅の長さ10mm内外。形はカマキリに似る。産卵は葉の上に1mmに満たない柄をつけて多数産む。幼虫は寄主のヒメフクロウグモなど葉上を徘徊するクモ類に取り付いた後に卵嚢に寄生する。または、幼虫が卵嚢に直接寄生するようである。昼間の確認は難しく夜間灯火に飛来するので、その時の発見が多い。
**【分布】**北海道、本州、四国、九州；朝鮮。
**【県内の状況】**我孫子市、市川市、松戸市、鎌ケ谷市、千葉市、成田市、大網白里町、東金市、茂原市、市原市、天津小湊町などの記録があるので、県内に広く生息していることが分かる。県北部では谷津田や谷津低地とそれに続く斜面林や台地林のある地域に生息し、自然度の尺度となる。県北部では生息環境の減少が続いている。
**【保護対策】**草地と広葉樹林が接する地域の保全をはかる。
**【文献】**平田（1997）／山﨑（1999）

（山﨑秀雄）



ヒメカマキリモドキ

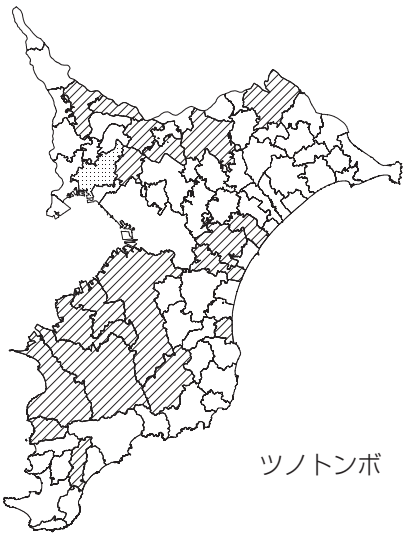
## C　ツノトンボ　ツノトンボ科

国：掲載なし
千：C－C－C

*Hybris subjacens* (Walker, 1853)

**【種の特性】**開張70mm前後、トンボに似るがトンボ目ではなく、触角が翅と同じぐらい長い。ススキの草原に生息する。幼虫はウスバカゲロウのそれ（アリジゴク）に似ており、草の根際や石などの下に潜み、小昆虫類を捕食する。夜間灯火にも飛来する。完全変態。
**【分布】**本州、四国、九州；東アジア。
**【県内の状況】**我孫子市、柏市、船橋市、八千代市、印西市、成田市、芝山町、酒々井町、印旛村、大網白里町、東金市、茂原市、市原市、鴨川市、などの記録がある。記録がない地域でも生息環境が存在するので、各地に生息していると判断ができる。生息数は少ない。県北部では生息環境が減少している。
**【保護対策】**ススキの優占する草原、または、林縁などの保全。
**【文献】**石原（1983）
**【写真】**P.174

（山﨑秀雄）



ツノトンボ